

2018年度 卒業論文

『近世ドイツの神秘思想家ヤーコプ・バーメの著作にあらわれたペストの表象』

慶應義塾大学 通信教育課程

文学部第3類 学籍番号11191833

伊藤 孔

指導教員： 香田芳樹 教授

目次

・ 序論	1
・ 第一章『ペスト』	
1.ペストの肯定的側面	4
2.中世のペスト	6
3.ペストの影響	9
4.衛生、医学、原因論	13
5.近世のペスト	16
6.ドイツ周辺地域の近世ペスト	18
7.パラケルススとペスト	20
・ 第二章『ベーメ』	
1.ベーメの周辺思想	23
2.ベーメと身体・病	28
3.ベーメとペスト	32
4.『アウローラ』における病	36
5.『アウローラ』におけるペスト	38
・ 第三章『天地創造とペスト』	
1.神の七つの霊	43
2.ベーメの創世記解釈	46
3.ペストの成り立ち	50
・ 結論 ベーメ神学におけるペスト解釈	52
・ 参考文献	54

序論

この論文では、近世ドイツの神秘思想家ヤーコプ・ベーメ（Jakob Böhme 1575-1624）の著作にペストがいかにかに表象されているのかを論ずる。中世ヨーロッパにおいて猖獗を極めたペストは、ベーメの生きた近世においても依然として治療困難な感染症であり、各地で流行を繰り返していた。ベーメはこの疫病によって息子を失った。また、多くの罪のない人々が罹患していくのを目の当たりにしたと推測される。現実の悪、目の前の悪としてのペストを彼がどのように捉え、彼の神智学に関連づけたのか。これを明らかにすることで、難解といわれるベーメ思想を理解する一助としたい。

本論に入る前に、日本におけるベーメ研究について概観しておきたい。ベーメは日本においては西谷啓治によって早くから紹介されていた^{*1}が、福島正彦の『ベーメ倫理思想の研究（1984）』がベーメの名を冠する初めての研究書となった。また征矢野晃雄による『黎明（1976）』、福島による『キリストへの道（1991）』など翻訳の登場により、研究の礎が築かれた。現在ではさらに藺田坦による『アウローラ（2002）』の完訳によって、その思想を学びやすい環境が整ってきている。

岡村康夫は『無底と戯れ』の中で、ベーメ研究における主要な視点を6つに分類している。即ち文献学的、伝記的、神学的、文学論的、哲学的、言語論的研究である^{*2}。このうち伝記的研究については、福島正彦に続いて岡村康夫が詳細に行っている。フランケンベルク（Abraham von Frankenberg 1593-1652）の伝記に頼りがちであった従来のベーメ像は補完され、現実に即したベーメ像が形作られつつあると言える。

ベーメ神学については、上記の2人はもちろんのこと岡部雄三が『ヤコプ・ベーメと神智学の展開』においてキリスト教における乙女ソフィア論の方面からベーメの思想を読み解いているし、『アウローラ』を翻訳した藺田による研究もある。これら成果から、キリスト教世界に常に存在していた悪の問題について、ベーメもまた立ち向かっていた事実を知ることができる。

哲学的・文学論的研究については、古くから影響が指摘されてきたシェリングやノヴァ

*1西谷啓治『神秘思想史』1932初出 『西谷啓治著作集 第3巻 西洋神秘思想の研究』創文社、1986、収録

*2岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、112頁

ーリスのほか、ドストエフスキーと関連させた研究を福島が紹介している。ドストエフスキーの癲癇とバームの神秘体験との類似性についてはこの論文の第二章でも触れる。小嶋洋介はメルロ＝ポンティ研究の中でバーム神学を美術史におけるマニエリスムと絡め、高山信雄はシェリングに先んじてバームを発見した哲学者としてイギリスのコウルリッジを挙げている。こうした研究から、国や分野をこえて研究されるバーム思想の幅広さをうかがい知ることができる。

バームがいかなる時代を生きたのかはのちに触れるが、バーム研究の中には、必ずといっていいほど彼の生きた時代の過酷さについての言及がある。代表的なものを引用する。

「バームを『激しいメランコリーと悲嘆』に沈めたのは、このような悪疫や同胞相打つ悲惨な争いに満ちた宗教改革後の時代背景があったのである。^{*1}」

「バームはルターによる宗教改革後の混乱期を、しかもペスト禍の蔓延する厳しい時代を生き抜いた人であった。^{*2}」

「バームの生きた時代は、ルターの宗教改革を経た後のキリスト教各宗派競合の時代であり、世界の崩壊と没落におののく不安定な時代であった。^{*3}」

「世の中が乱れているとき、有能な政治家や優れた大思想家が現れることが多い。[……]ルターの宗教改革、それに続く農民戦争、さらにはカトリック派の新教弾圧など、当時のドイツ国内は混乱していた。^{*4}」

「そうした荒廃した時代を背景に、彼は個人的な神秘体験を自身の根源的な体験としつつ、聖書を最大の知的源泉にして、現象の背後にある悪の本質の探究をめざしたのである。

^{*5}」

*1福島正彦『バーム倫理思想の研究』松籟社、1984、44頁

*2岡村康夫『無底と戯れ—ヤコブ・バーム研究』昭和堂、2012、ii頁

*3岡部雄三『ヤコブ・バームと神智学の展開』岩波書店、2010、10頁

*4高山信雄「コウルリッジとドイツ文学（二）——コウルリッジとヤコブ・バーム」『法政大学教養部紀要』57号、p17-42、1986-01、18頁

*5中山みどり「ヤコブ・バームにおける悪の思索——形而上の悪と人間——」『比較文学・文化論集』17号、69-79、2000-02-29、69-70頁

ベーム自身もまた、『アウローラ』（AURORA 1612）の中でこの世界を嘆いて以下のよう
に言っている。なお、『アウローラ』本文からの引用は、日本語訳の場合は創文社の藺田
坦訳『アウローラ（2002）』、ドイツ語の場合は Aurum Verlag から1977年に出版された
Gerhard Wehr 編集のものを用いる。

「天使たちはただ天上の荘厳を見るまでであるが、魂は天上と地獄のそれを見る。魂はその
の両者の間に生きるからである。*1」（第十一章七十二節）

「それゆえにこの生は、まさしく不安に充ちた、そしてたえざる苛酷、戦乱、戦闘、そし
て闘争の渦巻く、悲の谷とよばれるのである。*2」（第十一章七十三節）

これこそがベームの現世観なのであった。『アウローラ』が世に広まったのは1612年であ
る。つまり三十年戦争（1618-1648）の以前から、新教旧教の争いは彼の人生に大きな影
を落としていたことになる。岡村も言うように、あらゆる思想家と同じくベームもまたき
わめて特殊な状況下で思索していたのである*3。苛酷な時代背景が、彼に独自の神秘体験/
神智学をもたらしたことは疑いのない事実だろう。

しかしながら、誰もがベームの生きた時代に言及しているにもかかわらず、『アウロー
ラ』に表れる豊かなヴィジョンと彼の生きた現実との関連についてはあまり論じられるこ
とはなかった。そこでこの論文では、明らかな悪としての感染症・ペストに注目し、これ
とベームのヴィジョンとの関連を考察する。

第一章では、ヨーロッパにおけるペストの歴史を、ベームの生まれた16世紀末に繋げる
かたちで追っていく。その際、中世の人々が黒死病をいかに理解し、いかに立ち向かい、
いかに死んでいったかに着目する。抗生物質は20世紀に入ってはじめて発見されたもので
あり、ペストへの対処法は黒死病期から近世にかけてほとんど変わることはなかった。中
世の人々の体験は、ほぼそのままの状態で見世にも再現された。従って、中世の人々のペ

*1『アウローラ—明け初める東天の紅』 藺田坦訳、創文社、2002、149頁

*2同上、149頁

*3岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーム研究』昭和堂、2012、ii 頁

スト理解を知ること、近世を生きたベーメのペスト理解にも繋がるのである。

第二章では、ベーメのバイオグラフィに触れながら、彼の身体観とペスト観を察する。農家の息子として生まれた彼は、身体が弱かったために靴職人の道へと進む。ベーメにとって身体・病は幼少時代から重い意味を持っていたと推測される。また、ベーメが定住したゲルリッツの町は、ちょうどベーメが靴職人として独立した1600年前後にペストの猛威に晒されている。そして最初の著作としての『アウローラ』が世に広まる以前の1608年、ベーメは次男をペストで亡くしているのである。これら事実から、ベーメがペストに対して無関心であったとは考えにくく、彼の著作にこの疫病が影を落としていると推論できるのである。

第三章では、『アウローラ』に記された特徴的な世界創造の理論を用いて、この世界にペストがどのように生み出されるのかを考察する。『アウローラ』の後半部分で、ベーメは天地創造の場面を『創世記』の記述に沿って解釈している。この解釈に基づき、ペストの発症から死に至るまで、あるいは奇跡的に回復するまでのプロセスを組み立てる。これによって、ベーメが現実の悪をどのように『アウローラ』に読み込んだのか、言い方を変えれば、どのように神秘体験の表現に用いたのかを検討する。

第一章 ペスト

1.ペストの肯定的側面

ボッカッチョ（Giovanni Boccaccio 1313-1375）の『デカメロン』（Decameron 1349-1353）は、ペスト禍を逃れるべく引きこもった人々が退屈しのぎに逸話を披露するという物語である。この作品に先立つ1347年にペストはイタリアに上陸し、わずか数年でヨーロッパ全土に広がり、当時の全欧人口の1/4（約2600万人）の命を奪った^{*1}。人文主義の先駆けといわれるボッカッチョがペストを描いていることに象徴されるように、ペストはルネサンスの直前に猖獗を極め、その後18世紀半ばに沈静化するまで人々の恐怖の象徴であり続けた。

ヨーロッパ世界において黒死病と呼ばれならわされたペストを、ベーメの特徴的なヴィジョンと関連づける利点を以下に述べる。

*1滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、208頁

・ペストは知覚的に衝撃的な症状を呈し、かつ戦争を遙かに超える死者を出した社会的な感染症であった

最初の抗生物質としてペニシリンが登場するのは1928年のことである。この発見がもたらされるまで、人類が病原菌に対抗する手段はほとんど存在しなかった。ペストで亡くなった人の数は、中近世を通して戦死した人間の数を上回る。またペストは戦争時には比較的安全な位置にいた聖職者や富裕層も手にかけた。そしてかつ、ペストは戦争と同じほどに人々に衝撃を与える疾患であった。当時の人々は視覚的にも、聴覚的にも、嗅覚的にもペストを無視することはできなかつたと考えられる。戦争が作家に文学的な刺激を与え、戦争文学というジャンルを築いたならば、病の文学というものがあってもおかしくないだろう。このことは、中世の黒死病で父を失ったボッカッチョや、17世紀ロンドンでの大流行を体験したデフォー（Daniel Defoe 1660-1731）がペストを文学化していることからも知れる。『アウローラ』の豊かなヴィジョンに現実の光景が少なからず反映されていると想定できるならば、当時の人々にとって無視できぬ存在であったペストも必ずや取り入れられているはずである。これが、バームとペストを関連づける言わば文学的利点である。

・宗教はもちろん、錬金術や医学、似非科学など、あらゆる関心がペストに集中した

キリスト教会はほとんどの場合ペストを神の怒りとして理解しようとした。宗教改革を担ったルターもまたペストについては同意見だったようだ。当時まだ信用の薄い学問であった医学、科学革命以前には世界を理解する重要な手段であった錬金術や占星術もまた、ペストへ関心を向けた。

時代を席卷したペストは多方面から注目を集め、多方面に影響を与えた。一般にバームは無学な人物であったとされているが、当時の似非科学は無学な人々の間で流行したのだし、バームが錬金術や占星術に関心があったことは多くの研究者が指摘するとおりである。従って、バームはその時代に広まっていたペストへの様々な解釈から影響を受けていると想定することができる。思想的な影響はもちろんのこと、疑似科学的、自然科学的な影響を受けたことも十分に考えられる。バームの生きた時代のペスト理解を知ることで、彼の神智学の源流、思想の起源を辿ることができるかもしれないのである。これが、バームとペストを関連づけて考える思想史上の利点である。

以上のような利点をもって、現実での悪としてのペストを用い、ペーメのヴィジョンを読み解いていきたい。なお、しばしばペストの代名詞として使われることもある黒死病とは、一般には1347年から1352年、または1353年に大流行したペストをいうものであり、この論文でもその慣例に倣うことにする*1。

2.中世のペスト

宮崎は『ペストの歴史』で、ペストの世界的流行は現在までに3回あったとしている*2。一度目は6世紀から8世紀にかけてのものであり、このときペストは地中海沿岸からヨーロッパ内陸部、ブリテン諸島にまで広まった。ユスティニアヌス大帝の名前をとってユスティニアヌスの大疫とよばれる東ローマ帝国での大流行はこの期間のものであった。

第二次の流行が、ルネサンス直前からペーメの生きた近世を含む長い期間、即ち1340年代から1840年代までの流行である。ペストはロシアや北アフリカにまで到り、各地で流行を繰り返しながら人々の命を奪い続けた。

第三次の流行は1860年代から1950年代とされており、このときは主として中国・インドなどアジアにおいて猖獗を極めた。特にインドでは1896年から1920年の三十年足らずに一千万人にのぼる死者が出たという*3。

第一次流行と第二次流行の間にペストがまったく存在しなかったか、といえばそうではない。近世においてペスト聖人として崇められた聖ロクスは、異説もあるが、1295年から1327年を生きたといわれている。彼は1317年、ローマでペスト患者の看病にあたり、自身

*1「一三五三年まで西欧世界を荒廃させたペストを黒死病とよぶことになっている。」モニック・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、18頁

「黒死病という概念は、一般的には14世紀中葉のペスト流行に限って使われる。」滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、30頁

「慣例により一三四七年～五二年のペストに限り黒死病とする」宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、24頁

*2宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、8頁

*3津野海太郎『ペストと劇場』晶文社、1980、145頁

もペストに罹患したが、回復した^{*1}。また13世紀末の人であった聖ニコラは、ペストに蝕まれたが、聖母の加護によって快癒したという^{*2}。これらエピソードによって、第二次流行以前から散発的なペストがヨーロッパにあったことが分かるのである。この散発ペストが何故黒死病のような大流行に到らなかったのかは、この論文では触れない。

第二次流行におけるペストは1347年にはじまったとされる。南ロシアのクリミア半島に居留していたジェノヴァ人がそれに遭遇し、自分達が、あるいは自分達の持ち物が汚染されているとは知らずにヨーロッパに持ち帰ったのである^{*3}。最初の流行はジェノヴァ人が立ち寄ったシチリア島メッシーナに起こり、その後イタリア本土からヨーロッパ各地へと広がった^{*4}。

オーストリアにはヴェネツィアから侵入したとされる。1348年に感染者が確認され、1349年にはオーストリアの大半が黒死病に席卷された。ウィーンにはハンガリーから別ルートで伝搬した考えられており、1349年1月に当時人口5万人ほどのこの都市に感染者が現れた^{*5}。

ドイツにおいてもオーストリアと同じく1348年に感染者が現れ、1349年に本格的侵攻が始まった。バイエルン地方で最初の大流行が起こり、モラヴィアやボヘミアがそれに続き、1350年にはドイツ北部へ拡大していった^{*6}。しかしヴェルツブルク-ニュルンベルク-プラハについては、この時代の犠牲者は全人口の10%程度に抑えられた。ペストは中部ドイツに差し掛かったところで冬季の寒冷に足止めされ、西へ進路を変えたようだ。また、ニュルンベルクから中部ドイツの諸都市に、南ヨーロッパに比べて公衆衛生の下地があったこと

*1滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、155頁

*2モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、150頁

*3滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、9頁

*4同上、34頁

*5宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、58-59頁

*6同上、60-61頁

も要因のひとつとして挙げられている^{*1}。このドイツでの最初の流行が下火となるのは1351年であった^{*2}。

ポーランドはこのときの流行では無事でいられた。カーズイミニア王によってペスト遮断線が設けられていたおかげであるという。このペスト遮断線がいかなるものだったかは分からないが、18世紀にオーストリア・トルコ間で築かれた検疫設備と、規模は違えど似たようなものだったのかもしれない。しかし1360年以降、ペストは向きを変えて東から西へと流れ、ハンガリー、プロイセン、西部ロシアからポーランドに襲いかかった^{*3}。

こうしてヨーロッパ全土に広がったペスト菌は、常在菌となって中世以降も人々を苦しめた。近世のペスト、及びペーメが住んだゲルリッツにおけるペストについては後述する。

黒死病期を含めてあらゆる流行において、発症したペストのほとんどは腺ペストであった。一般的に腺ペストは、リンパ節に中世以降ブボと呼ばれることになる腫脹を来し、発病から1週間ほどで死に到る。死亡率は50%から70%であるという^{*4}。従って、ペストは決して不治の病ではなかった。17世紀のオーストリアの宮廷医師ポール・ソルベは、真偽は確かめようもないが、何百人ものペスト患者を治すことができたと言っているという^{*5}。

腺ペストが重症化するとペスト敗血症となり、皮膚のあちこちに出血斑ができ、全身が黒いあざだらけになる。これが『黒死病』の由縁であり、ドイツ語で"der schwarzer Tod"とはこの症状のことである^{*6}。ペスト敗血症は重症例であり、ここに到ると死亡率は跳ね上がる。腺ペストの悪化からペスト敗血症が生じるという一般のプロセスを覚えておきたい。腺ペストの段階では回復例があったため、人々はペストは治すことができるのだと考え、その治療法を探したのである。もし腺ペストの段階での致死率がもっと高かったなら、教

*1宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、109-110頁

滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、54頁

*2宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、69頁

*3ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、74頁

*4加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版、2013、45頁

宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、5頁

*5ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、134頁

*6加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版、2013、46頁

会や医者、錬金術師、占星術師がペストに立ち向かうようなことはなかつただろう。ペストが研究の対象となったのは、治る、治せるという希望が現実にあったからなのである。

腺ペストの流行に続いて希に発生するのが肺ペストである。肺ペストは飛沫感染する。発症後2、3日で死に到る。死亡率は100%に近い。従ってこの病態に関しては夢も希望もない。ペスト死亡者の記録を辿っていくと、安定期に続いて唐突に数字が跳ね上がることがある。これが肺ペスト出現のサインである。肺ペストは一般的な病態ではないが、それが発生したときの地獄のような有様から、記録にも記憶にも残りやすい。

3.ペストの影響

「兄は弟を棄て、叔父は甥を見放し、姉は弟を顧みず、時には妻も夫を顧みなくなりました。そればかりか信じがたいことですが、父親や母親が子供を、世話をするどころか、そんな子供はいないかのように、面倒も見ずに避けて通ったのです。[……] ペストの猛威にさらされてフィレンツェの市中では昼夜をわかつた死者があまりにも数多く出ましたから、その様を聞けば慄然とし、直接目で見れば茫然とするようなことが次々と起こりました。

*1] ボッカッチョ『デカメロン』

「万人が枕を並べて死んでゆく、善良な人間も、悪い人間も、何ら区別なく死んでゆく、……*2」デフォー『ペスト』（A Journal of the Plague Year 1722）

ボッカッチョからの引用は中世の黒死病、デフォーからの引用は近世のロンドンでの大流行を表現したものである。中世においても近世においても、人々のペストに対する認識はほとんど変わらなかった。

現代におけるドイツ語"Pest"は、日本語におけるペストと同義語として通用するが、中世では異なる使い方をされていた。ラテン語"Plaga"（打撃、災難の意味）にその源を持つため、質の悪い疫病一般を指す言葉として用いられていたのである*3。またリュスネによ

*1ボッカッチョ『デカメロン 上巻』平川祐弘訳、河出文庫、2017、23-24頁

*2ダニエル・デフォー『ペスト』平井正穂訳、中公文庫、2009改版、128頁

*3滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、29頁

ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、48-49頁

れば、黒死病期の人々はこの災禍を悪疫としての「ペスト」とあえて呼ばず、「大量死」と表現するにとどめることもあったという^{*1}。疫病と口にするのは縁起の悪いことでもあったのだ。

ペストという呼び名が現在のペスト、即ちペスト菌に感染して発症する感染症を表す言葉として使われ始めるのは17世紀後半に入ってからである。ウィーンにおいては、1679年の大流行の際には、ペストという言葉がある一定の特徴を持った病気を指して使われていたという^{*2}。また、ドイツにおいて「黒死病 schwarzer Tod」という一般名称が定着するのは随分遅く、19世紀に入ってからであった^{*3}。一方ロシアやフランス、イタリアでは黒死病期からすでに「黒い～」という名称が用いられていたようだ^{*4}。17世紀初頭に活躍したベーメの著作を読むとき、そこに表れる「ペスト」がどの疫病を指しているのかは推測するほかない。腫脹や大量死といった言葉を伴うならば、それはペストである。「黒い～」という記述があれば、社会的にはペストは「黒い病気」として認識されていたことは間違いないので、それもペストと結びつける根拠となり得る。

なお、英語では"Pest"という単語は疫病の意味を持たない。"plague"がその役割を引き受けている。これもラテン語"Plaga"に語源を持つ単語である。滝上は『ペスト残影』の中で、ペスト研究のためにタイトルに"plague"とつく本を買ったところ、エイズや出血熱のことばかり書いてあったという体験を書いている。ドイツ語における"Pest"が広く疫病の意味を引き受けていたのと同じように、"plague"もまたペストのみに用いられるわけではないのである^{*5}。辞書的になるが、"the plague"と書けばペストを示すことになり、"Black Plague"と書けば黒死病、ブボンを伴う腺ペストについてはそのまま"bubonic plague"、肺ペストは"pneumonic plague"となるようだ。

ペスト以外の「ペスト」についても触れておく。17世紀前後において最も難渋な疫病と

*1モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、12-13頁

*2ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、133頁

*3宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、25頁

*4ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、49頁

*5滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、29-30頁

して知られていた「ペスト」は7種類あったとされる^{*1}。即ちイギリス発汗病（粟粒熱）、癩病、腺ペスト、天然痘、発疹のない高熱、発疹チフス、癩癩性の卒中である。滝上はこれに似た見解として、16世紀初頭のヨーロッパの悪疫としてペスト、発疹チフス、発疹熱、梅毒、イギリス発汗病（粟粒熱）、天然痘、赤痢、ハンセン病などの流行病や麦角中毒を挙げている^{*2}。いずれの見解においても、ペストが中近世を通して治癒の見込みの少ない病と認識されていたことが分かる。これらの中で粟粒熱のみはバームの時代にはすでに過去のものであったと考えられている。ただし近世においては急性のインフルエンザなどを粟粒熱と称した場合もあるだろうから、その存在を無視することはできない。

では、ペストのような脅威的な伝染病に対して、人々はどのような反応を示したのだろうか。加藤は著書の中で、病原体が原因である恐怖の環境下におかれた人間の心理として次の三つをあげている^{*3}。

(1)刹那的な欲望の追求や浪費に身を持ちくずす

黒死病で父を失った人文主義者ボッカッチョが、放蕩にふける当時の人々を描写している^{*4}し、彼の『デカメロン』の内容も典型的なこの例である。黒死病期には若者や女性の服装が派手なものに変化したという指摘もある^{*5}。バームと時代を同じくするシェイクスピア（William Shakespeare 1564-1616）の『じゃじゃ馬馴らし』（The Taming of the Shrew 1594年初演）も放蕩の一例であると加藤は指摘している。ロンドンでは1592年にペストが流行し、劇場が閉鎖されているのである^{*6}。

こうした放蕩は、しかし人類にとって悪いことばかりではなかった。ペスト流行による

*1ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、132-133頁

*2滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、145頁

*3加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版、2013、41頁

*4宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、71-72頁

ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、37-38頁

*5宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、114頁

*6加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版、2013、31頁及び41頁

人口減少のあとには必ずといっていいほどベビーブームが起こったのだが、それを牽引したのがこの刹那的な欲望だったのである。人々が現実の大量死に鬱屈としたままでは、ヨーロッパの人口は先細ってしまっただろう。ペストが老人と身体の弱いものを根こそぎ奪い取っていったため、ペスト流行後の平均寿命はむしろ伸びた。働き手の不足のために賃金が上がり、周囲の農村から続々と労働者が流入した。大都市は瞬く間に人口を回復し、次の時代に突き進んでいったのである。^{*1}

(2)この悪疫が神からの試練であると考え、懺悔して神に頼る

この代表例として加藤は鞭打ち苦行者を挙げている^{*2}。黒死病の最中に鞭打ち苦行者は爆発的に増加した。彼らはペスト流行以前から存在していたが、黒死病期にはヨーロッパ全土に広がるほどの流行を見せた^{*3}。

鞭打ち苦行者ほどではないにしても、ペストの流行を目の当たりにして信仰心を募らせ、聖母やペスト聖人に祈った者は多かった。「ペストは教会にとって迷える羊をみずからのところに連れもどす絶好の機会となった。^{*4}」のである。身内の死によって遺産を手にした人々は、家族の魂を慰めるべく寄進に励んだ。この信心の高まりによって、教会は多くの記念塔や聖堂を新たに建設することができた^{*5}。実に18世紀に入るまで、「医師が人々の信頼を得ようといかにも努力しようと、教会がその影響力を失うことはなかった^{*6}」のである。

しかし、聖職者もペストと無縁ではいられなかった。教会が被った人的被害は恐るべきものであったようだ。1348年の1年間だけでローマ・カトリック教徒の30パーセントが死亡

*1モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、193-194頁

*2加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版、2013、41頁

*3ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、51-56頁

*4モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、62頁

*5宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、118-119頁

*6ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、196頁

したという指摘がある^{*1}が、イギリス全土の統計では、聖職者の死亡率は一般住民の約2倍だったという^{*2}。患者に寄り添った聖職者が斃れ、さっさと逃げ出した聖職者が生き残るという、キリスト教会の矛盾が浮き彫りになったのもこの時代であった。

(3)犯人を仕立て上げて迫害する。

この例としてユダヤ人虐殺が挙げられるが、この論文では触れない。

ペストは恐るべき災禍ではあったが、生き残った人々に信仰心や労働、そして放恣を行うに足る財産をもたらすという面も持っていた。「歴史的にみたペストの流行は、人々のあいだに放恣と禁欲という対極的な反応をひきおこすのがつねだった^{*3}」のである。

だが、これはあくまでも都市部でのことである。農村部では、ペストの流行はそのまま滅亡を意味した。ベビーブームは田舎には縁のない言葉であった。人口減による廃村が各地で相次いだ^{*4}。とくにドイツにおいてそれが著しかった^{*5}。この時代のドイツには大都市が少なく、小規模な農村が点在していたからである。

ペスト禍のあと、都市部では労働者の減少によって市民階級の地位が相対的に上がり、社会改革への道が開かれた。一方農村部は深刻な過疎状態となり、領主の収入が悪化して古くから続く封建制が揺らいだ^{*6}。中世に対する近世の特色として個人の出現が挙げられるが、ペストは封建領主を弱体化させたという点においても、市民の出現を助けたという点においても、中世の終焉を早めたのである。

4.衛生、医学、原因論

*1モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、18頁

*2滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、96頁

*3津野海太郎『ペストと劇場』晶文社、1980、220頁

*4モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、75頁

*5宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、121頁

*6同上、123頁

ペストのあとに公衆衛生の意識が高まったのは当然のことであった^{*1}。人々の衛生への意識は、ときに恐怖心となって暴走した。ペスト患者の出た家屋を患者とその家族もろとも焼き払ったという記録も残されている^{*2}。しかし試行錯誤の中で衛生観念は徐々に精緻化していき、ペストが18世紀半ばから姿を消していく一因となった^{*3}。

公衆衛生による予防は一定の効果を上げる場合もあったが、中近世を通して、治療に関しては有効な手段がとられることはなかった^{*4}。外科医が行った瀉血などは、ペストに対してはむしろ逆効果であることが多かった^{*5}。瀉血法は17世紀の終わりに打膿法にとって変わられるまで、ペストへの標準的な治療とされていた^{*6}。さらに打膿法もまたペストに対して妥当な治療とはいえないものであった。この2つのほかに珍奇な軟膏や魔術的な手法もとられたが、現代の視点において医学的な根拠のあるものはほとんどなかった。

この時代ペストを避けるために唯一確実な手段といえ、ヒポクラテスの言説に倣い、「できるだけ早く出発し、できるだけ遠くへ行き、できるだけゆっくり戻って^{*7}」くることであった。またリュスネによれば、「フランスの歴代国王は逃亡の口火を切った人びとになった。^{*8}」のであり、オーストリアの王家も似たようなものであった。デフォアの『ペスト』でも、主人公の兄一家はペスト流行初期にロンドンから逃げ出している。ただ、首尾よく逃避できたのは富裕階級を中心とした一部の人々であり、貧者は為す術もなく病に倒れるか、逃げ出しても途上で飢えに苦しむことになった^{*9}。都市当局はこのような逃亡

*1宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、125-128頁

*2滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、71-73頁

*3宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、第十一章参照

*4同上、11頁

*5ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、35-36頁

*6同上、160頁

*7宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、72頁

滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、75頁

*8モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、98頁

*9宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、72-73頁

を防ぐためと、近隣都市との通商関係維持のためにたびたびペストの発生を隠さなければならなかった^{*1}。従ってペスト発生初期に適切な対応がとられないことも多かったのである。

中世においてペストの原因として一番に考えられたのは、神の怒りであった。最愛の人ラウラを黒死病で失ったとされる人文主義者ペトラルカ（Francesco Petrarca 1304-1374）もこの見解を書簡に記している^{*2}。15世紀にハプスブルク家の侍医であったソフィーアは、バッタの腐敗した亡骸を星および地球の影響と結びつけてペストの原因と見なした^{*3}。こうした占星術的な見方も当時流行したペスト論の一つであり、17世紀に到るまで根強く支持されていた。疫病は大気の汚染によるものであるという説も中近世を通して信じられてきた考え方であり、パラケルススのような医師、錬金術師もこれを支持していた。パラケルススのペスト理解については後述する。1546年には微生物が原因だとする説が現れるが、これが一般に受け入れられるまでには長い時間がかかった^{*4}。やや時代は飛ぶが、17世紀ウィーンにおいては、医師達は人間から人間への接触によって広まる接触感染主義者と、汚染された空気によって感染する疫病主義者、衣服や繊維製品に潜むペスト虫の存在を信じて疑わない伝染病主義者に分かれて議論をしていたという^{*5}。肺ペストの出現を含めるなら、これら3つはそれなりに正当性を持っていると言える。ユダヤ人による毒物投下説は歴史の恐るべき一頁である。ペスト塗りやペスト撒きといった人為的ペスト説は近世においても消えることはなかった^{*6}。

神の怒りという概念は、ベーメの思想を理解するうえで極めて重要なものである。このことは後述する。ベーメはまた星や大地について考察する占星術的な見方にも通じていた

*1モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、105頁

*2宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、89頁

*3ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、37頁

*4宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、93-94頁

*5ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、135-136頁

*6同上、144-148頁

し、疫病と大気を関連づけた文章も残している。こうした一つ一つの要素を即ペストに繋げるのではなく、中近世に広がっていた疫病に対する一般的な理解をベームもまた共有していたのだと考えるべきだろう。

5.近世のペスト

ベームは1575年、オーバーラウジッツ地方の小村に生まれ、長じて近郊の都市ゲルリッツに移った。若きベームは靴職人の親方になるためにシレジアやボヘミアを遍歴し^{*1}、靴職人をやめて行商人になってからは、毎年プラハまで商いに行っていたという^{*2}。晩年にはゲルリッツの東、リーグニッツにしばらく逗留し、死を迎えるその年にはドレスデンにも赴いた。過酷な時代を生きたと広く認識されるベームであるので、旅の最中には多くの悪を目撃することになったはずである。では、彼が実際に目にしたペスト、16世紀後半から17世紀にかけてのペストとはいかなるものだったのか。

宮崎は、近世ペストの特色を以下のように述べている。

「ペストの流行はそのような指標と無関係に黒死病期から十六世紀まで継続する。その間に形成された特色はペストのヨーロッパ世界における常在化、流行規模の縮小、流行の反復であった。常在化、縮小、反復はペストの三大特色となっていた。^{*3}」

ペスト菌はマイナス2度からプラス45度の範囲で生存する。最適温は26度であるという。中近世世界においては徹底的・規律的な滅菌が行われることは少なかったため、人家にあれば越冬も可能だった。埋葬された死体の中で半年以上生き続けることができるとされており、流行期に作られた集団墓地が動物に掘り起こされて再流行のきっかけになることもあったようだ。一度ペストが流行った地域では、ペスト菌は消えることはなかった。ペストは常在化したのである。^{*4}

*1岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーム研究』昭和堂、2012、139頁

*2福島正彦『ベーム倫理思想の研究』松籟社、1984、60頁

*3宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、137頁

*4同上、7頁

流行規模の縮小については、ペストがヨーロッパ全体で猛威をふるっている間に比較的伝染性の弱い形態へと変化し始めた可能性が挙げられている^{*1}。よって、近世のペストは当時人口増加の一途にあった都市部を中心に起こった。また、軍隊も往々にして疫病につきまといわれた^{*2}。両者に共通したのは人間の密集と劣悪な衛生環境であった。1634年のレーゲンスブルクのように、三十年戦争の災禍とペスト禍の二重苦を味わった都市も記録されている^{*3}。もっとも、データが残っているのが都市及び軍隊におけるペストのみで、村落における発生については不明な部分が多いことも事実である^{*4}。

流行の反復については、次節でウィーンやゲルリッツを例にして取り上げる。

このような近世ペストに対して、人類がとれた手段は中世と変わりなかった。聖職者は神に祈り、医者は瀉血と浣腸を万能薬として推奨した^{*5}。近世においても、ペストは極めて難治な感染症だったのである。

衛生面では中世よりもやや進展していた。これは経験面の蓄積が大きい。1628年に始まったトゥルーズでの大流行では、患者が利用した家屋や物品の掃除、焼却が規律的に成され、室内では消毒の意味で芳香性の植物がいぶされた。この大流行を収束に導いた優れた先見性の持ち主であるルイ・リベロン神父は、芳香性の植物に加えて砒素、水銀塩、硫黄ほか殺菌殺虫に効果のありそうな物質をすべて用いたという^{*6}。ウィーンでは、1650年代に燻蒸するよりも石灰と酢で消毒すべきであるという見解が登場した^{*7}。ただしこれらはあくまでも先進的な例であり、近世においても衛生医学の大部分は迷信によって支配されていた。

1562年にウィーンで、1607年にはアウスブルクで感染防止のための法律が発令された。

*1宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、111頁

*2同上、139頁

*3滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、192頁

*4宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、135頁

*5ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、130頁

*6宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、159頁

*7ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、85-86

これらには「神嘉し給う生活」を送ることが具体的に指示されていた。近世においてもペストは神の怒りにその主たる原因があると考えられていた証しである。この法律は17世紀半ばまで守られた^{*1}。ペーメは1624年に亡くなっているのに、これら条例が廃止されるのを見ることはなかった。敬虔なキリスト教徒であり家族思いの父親でもあったペーメが次男を失ったそのとき、ペストはまだ神が成し給うことだったのである。これは彼のその後の活動を考えるに際して重要なポイントだろう。

6. ドイツ周辺地域の近世ペスト

複数の著述家によれば、"Vienna ventosa aut venenosa"（ウィーンでは風かペストが荒れ狂っている）という状況であった。研究によってその数は前後するが、ウィーンは1349年の黒死病到来から1713～14年の最後の流行まで、実に18回以上のペスト流行に見舞われた^{*2}。もともとオーストリアはアジアやイスラム世界からの人口流入が多かった。さらに隣接するハンガリーが齧歯類の繁殖しやすい大平原を抱えていたこともあり、この地域において人口の多いウィーンは必然的にペスト禍に悩まされることになった。その流行はほぼ10年に一度訪れた。この10年というのはペストの免疫期間だという研究もあるようで^{*3}、最後の流行が起こる18世紀初頭までウィーンは常時ペスト菌に晒されていたと考えられる。ペーメの存命期間に限れば、1586年と1588年にウィーンで大規模な流行が記録されている^{*4}。

もちろん近世においてウィーンだけがペストに悩まされていたというわけではなく、フランスでも「アンシャン・レジーム期には、人は二十五歳までに自分の人生で一度はペストを経験した。^{*5}」のであり、ヴェネツィアでも1570年代には一日の死者が四百人を超す

*1 滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、84-85頁

ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、79頁

*2 滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、17頁

ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、73頁

*3 宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版、2015、7-8頁

*4 滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、224頁

*5 J・N・ピラバン『人間とペスト』（1975）——モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、82頁より孫引き

激しい流行が起こっていた^{*1}。16世紀から18世紀初頭にかけての都市における流行は全欧的なものであった。

プラハでは1679年、オーストリアのレオポルト1世がウィーンでのペスト禍を逃れて宮廷ごと引っ越してきた際に、ペスト菌も一緒に連れて来たため流行が起こった^{*2}。1714年にはプラハ郊外にペストの沈静化を記念した塔が建立されている^{*3}。黒死病期には比較的被害の少なかったプラハも、ウィーンやパリほどではないにしろ、ペストに苦しめられた。

ポーランドでは、ベーメが生まれる直前の1572年に全土にわたる流行があった^{*4}。1706年にも流行があり^{*5}、この地域においてもペストが常在菌となっていたことが分かる。ただ農村についての資料は都市部より少ないため、大都市の少なかったポーランドの事情はオーストリアほど詳しくは分からない。

前述のとおり、ペスト流行時には病死者に加えて逃亡者も現れる。ベーメが生きた16世紀末から17世紀初頭のドイツには、ペストを逃れて大都市からやってきた人々が散在していたと考えられる。逃亡先や逃亡中に発病して野垂れ死んだ者も多くあっただろう。遍歴者としてのベーメが、ペストを見も聞きもせずに生活できたとは考えられない。

ベーメが定住したゲルリッツも、たびたびペストに侵略された。最大の流行は1585年から86年にかけて起こったが、このとき10歳前後のベーメはまだアルト・ザイデンベルクの親元にいた。しかしその後起こった1599年、1607年、1612-1614年の流行は、ベーメの人生に深く関わっているように考えられる。ゲルリッツの状況については第二章で詳しく述べる。

近世ドイツにはペストメダルなるお守りが広く流通していた。16世紀のペストターラーや17世紀のペストペニツヒ、18世紀のハンブルクのペストメダルなどがそれである^{*6}。このようなことから、ドイツにおいてペストが広く一般的な疫病として恐れられていた

*1津野海太郎『ペストと劇場』晶文社、1980、70-71頁

*2ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、109頁

*3滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、123頁

*4ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、147頁

*5同上、151頁

*6滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、2002、143-149頁

ことが分かる。ペーメはまさにこの疫病吹き荒れる近世ドイツを見つめたひとなのである。

7.パラケルススとペスト

第一章の最後に、近世ドイツにおいてペストに立ち向かった医師の一人であり、またペーメに多大なる影響を与えた思想家・錬金術師でもあるパラケルスス（Paracelsus 1493-1541）について触れておく。彼は"De pestilite, das ist, vom Ursprung unnd Herkommen Pestis, und hernach von derselbigen kranckheit eigentlichen und gründlichen Cur geschrieben"（『ペストについて』）なる著作を残しており、ペストについて多くの見解を生み出した人物として、近世社会に高い影響力を持っていたようだ。曰く、近世ウィーンで人気を集めた三酸化砒素樟脳樟脳の護符はパラケルスス由来である^{*1}。曰く、この医師はペスト流行時には糞尿はすべて、とりわけ人間の糞便は健康によいと推奨した^{*2}。パラケルススの学説に基づいて、ヘビヤカエル、特にクサリヘビが特効薬として有効であると力説したものがいた^{*3}。このクサリヘビの特効薬については、フランスでも流行した^{*4}。にもかかわらず、現在まで伝えられているパラケルススの発汗水のレシピには、クサリヘビは記されていない^{*5}。

コイレ（Alexandre Koyré 1892-1964）によれば、パラケルススは「天体の影響を疫病の流行などの集団的現象の説明のためにしか認めようとしなかった^{*6}」ようだ。パラケルススはそれまでの医学に対して実験の価値と必要性を説いたとされている^{*7}が、そんな彼ですら、天体の影響という中世的価値観を完全に無視することはできなかった。いやむしろ、「天体の影響をまったく認めないような人物は、彼の時代にあっては進歩的な人間ではな

*1ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、163頁

*2同上、151頁

*3同上、151頁

*4モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳、同文館、1998、145頁

*5同上、238頁

*6アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、1987、117頁

*7同上、116頁

かった。そうした人は、良識の人ではあっても、本当の意味の科学的思考を知らぬ人なのである。^{*1}」という指摘のとおり、優れた科学的思考を持っていたからこそ、正体不明の疫病を天体の影響として解析しようと試みたのだと考えられる。

パラケルススは神秘思想家としても知られており、独自に悪の問題を考察している。コイレによれば、パラケルススにとっての悪とは以下のようなものであった。

「ある者にとっての悪は、ある者にとっては善である。[……] かくして、悪はそれ自体で存立しているものではない。悪ということが言われうるのは何らかの別の存在との関係においてなのである^{*2}」

このような善悪観に基づいて、パラケルススは病を分析する。

「かくして、病気とは、その大半は、生命の二つの流れの間の争いに他ならない。病気もそれ自体としては一個の存在、実在、生命なのである。[……] 人や動物もそれぞれに他の生命を破壊すべく定められているのである。病人のアルケウス {始源者} はこの寄生的生命と戦う、病気にとっての敵対者であり、医者はこの戦いに助太刀する。この争いとそれから生ずる混乱、またその前提をなす不調和、これが悪なのである。^{*3}」

悪とは対立である。対立が解消され、秩序が回復すれば、悪は消滅する。従って悪は存在ではない。これがパラケルススの悪の問題に対する解答であった。

しかしすべての病気がこのように解釈されるわけではないと彼は書いている。物質の腐敗や天体の諸力の悪しき影響に由来する病気を、彼は「タルタロスの (tartarische) /カガストルムの (cagastrische)」病気と呼んだ。ペストは典型的なカガストルムの病気であろう。それは二つの生命の対立ではなく、一つの生命がこの世界に存在する際に、その存在

*1アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、1987、117頁

*2同上、151頁

*3同上、152頁

の環境に対して抗う、というものである。これによって体液が腐敗したり、身体が変質したりする。パラケルススはこの現象を無秩序という言葉で説明する。天体の諸力が秩序を外れて強すぎたり弱すぎたりする。栄養が過多だったり不足だったりする。このような秩序の崩壊が起こるのは、この世界の物質その全体が腐敗しているからである。そしてその腐敗の源は、ルシフェルの転落という秩序への反逆、神との対立の発生にある。よって、根源的な悪もやはり対立に帰されるのである^{*1}。

パラケルススがルシフェルの墮落や病気の発生について考察していることに注目したい。これはベーメにとっても重要な概念である。また、パラケルススが導入したカガストルム (Cagastrum) という概念は、鶴岡の注によれば、宇宙が形成される際に使われる未分化の素材が墮落・変質したものであり、またの名を硝石の塩 (sal nitri) であるという^{*2}。サルニテルという物質は、この世界を構成する要素としてベーメも採用している。このほかにもベーメは塩、硫黄、水銀などの錬金術的概念を著作に導入しているが、これはパラケルススからの影響であると指摘した研究もある^{*3}。

パラケルススは著述にラテン語ではなくドイツ語方言を用いたので、ラテン語教育を受けていないベーメも彼の作品を読むことができた^{*4}。また、後述するフランクやヴァイゲルの作品を通して、間接的にその科学観や思想を吸収することもできたはずである。パラケルススがベーメの科学観、病観、そして神学観に与えた影響は多大であると考えられる。

もちろん、中近世に錬金術師はパラケルススただ一人というわけではない。ベーメの著作における錬金術的な要素は、パラケルススからの直接的影響はもちろん、中近世に全欧的に広がっていた錬金術的思考を取り入れたものであると考えるべきである。

第二章 ベーメ

*1アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、1987、15
2-155頁

*2同上、136-137頁及び191頁

*3藪田坦『無底と意志－形而上学 ヤーコプ・ベーメ研究』創文社、2015、83頁

*4アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、1987、11
8頁

1. ベーメの周辺思想

ベーメ個人の分析に入る前に、彼がいかなる文化圏に育ったのかを整理しておきたい。まずはオーバーラウジッツ地方の大まかな思想的背景についてである。ベーメは前半生のほとんどをオーバーラウジッツ地方で過ごしている。その間専門的な教育を受けたという記録はない。彼の人生が基本的にはアルト・ザイデンベルク-ザイデンベルク-ゲルリッツという狭い範囲に収まっていたことを考えると、この地域の思想的背景を無視してしまうことはできないはずだ。

オーバーラウジッツ地方は、16世紀初頭にカトリックの擁護者であるハプスブルク家の領地となっていた。そのためこの地方での宗教改革は、近世ドイツに広く見られたような封建政治の道具としてではなく、庶民からの要求に教会が応える下からの改革として広がっていった。あからさまな革命を回避するために、教会の要件について町の参事会などが自由裁量で執行できる取り決めになっていたのだという。このような寛大な教会政策が、異端ともとられかねない神秘主義的傾向を許容する文化を育てたのではないかと岡村は指摘している。^{*1}

ハプスブルク家は戦費調達などに苦勞し、ルター派のザクセン選帝侯をこの地方の調停者として立てた。しかしザクセン選帝侯は新教側の中心者となったカルヴァン派のプファルツ選帝侯と折り合いが悪く、オーバーラウジッツ地方は旧教と新教、新教の中でもルター派とカルヴァン派が厳しく牽制し合う地域となっていく^{*2}。

以上が、ベーメの生誕と前後する、オーバーラウジッツ地方の思想背景である。各宗派が睨み合う環境にありながら、あるいはだからこそ、足下の教会政策は比較的自由だった。この点が、ベーメの思想形成のうえで重要なポイントとして挙げられる。ベーメは20歳前後でゲルリッツに居を定めるが、この町にもオーバーラウジッツ地方特有の人文主義的な雰囲気があり、ベーメの思想形成に大きく関係した^{*3}。市長のスクルテートゥスはパラケルスス主義者と結びつきのある人物で、天文学者のケプラー（Johannes Kepler 1571-1630）の友人でもあった。ケプラーは1607年にゲルリッツを訪れ、スクルテートゥスのもとに滞

*1岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、123-124頁

*2同上、125頁

*3同上、130頁

にしている。医師であり錬金術師であり旅行家でもあったヴァルターなる人物もスクルテートゥスの友人であり、スクルテートゥスを通じてベーメと知り合い、ベーメの家に3ヶ月間滞在した。このヴァルターがベーメを「ドイツの哲学者」と呼んで北ドイツやパリに喧伝し、各地にベーメの思想を広めた^{*1}。なお、ケプラーのゲルリッツ訪問もヴァルターのベーメ家滞在も、処女作『アウローラ』執筆以前のことである。

次にベーメが影響を受けた人的思想的背景を整理する。まずルターとカルヴァンについてだが、藪田による指摘「ベーメは、神の絶対主権や予定説を強調するカルヴァンの思想的立場には批判的であった。^{*2}」のとおり、ベーメはルターには好意的だったが、カルヴァンのことは好ましく思っていなかったようだ。先述のとおり、オーバーラウジッツ地方はルター派のザクセン選帝侯の影響下にあったので、新教の中では当然ルター派が中心となっており、ベーメもこの趨勢をそのまま吸収して育ったものと考えられる。

ベーメが周囲から受けた神秘主義的影響については、まずは岡村圭真の次の言葉を引用しておきたい。

「ところが、一般にベーメの神秘思想には、中世のエックハルトや、その後継者たるタウラー、ゾイゼといったドイツ神秘主義の源流とは、必ずしも一致せぬ雑多な要素が加わっている、と考えられてきた。たとえば、かれの自然哲学がそうである。パラケルススとかヴァイゲルの如き、ドイツ的汎知学の影響のもとに、たしかにベーメは、神秘主義的な神の認識と自然哲学的な万有の探求とは不可分のものであると考えたのである。^{*3}」

神智学はもともと横や縦の繋がりが薄く、一つの学問体系として成り立つようなものではない。例外があるとすればエックハルトとタウラー及びゾイゼという師弟関係であり、そのこともあって岡村圭真は彼らをドイツ神秘主義の源流と呼んでいるが、ベーメの神秘思想はやはりこの源流と線で繋がるものではないのである。

*1岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、130-134頁

*2『アウローラ—明け初める東天の紅』藪田坦訳、創文社、2002、429頁（藪田による注）

*3岡村圭真「ヤコブ・ベーメ論」『密教文化』101号、58-71、1973、59頁

では、ベーメの独自性の源泉はどこにあるのか。彼の神智学は、中世の神秘思想家が見ることのなかった新教旧教の争いや、錬金術や占星術、さらにコペルニクスにはじまる地動説の問題など、種々様々な影響が指摘されている。以下にそのいくつかを引用する。

「ベーメの体系は、いわば哲学と占星術と神智学とが混然と融合したようなものなのである*1」

「この間にパラケルズスおよびパラケルズス主義の諸思想との何らかの出会いがあり、またより手近な宗教的（黙示録的ないし予言的な性格の）書物やパンフレットの類を多く読み、かつ耳にしていたであろうことが推測されている。当時のドイツの一般的精神的状況からして、前者は医師や薬剤師、また自然哲学的な関心をもつ人々との交渉のうちでたえず起こり得たし、また後者は、世紀転換期のこの時期に盛んに現れていたと考えられるからである。*2」

「ベーメは、その手紙から窺い知ることができるように、オーバーラウジッツよりもニーダーシュレージエン地方に彼の多くの仲間を見出している。それは先に述べたように彼が靴職人としての修業時代にこの地域を遍歴したことに起因すると思われる。この地域にはフスの時代以来、先に挙げたカスパー・シュヴェンクフェルトに代表されるような宗教改革からの分離派を産む土壌があったと考えられる。*3」

コイレは、ここに名前の挙げたパラケルスス、シュヴェンクフェルト（Kaspar Schwenkfeld 1490-1561）、ヴァイゲル（Valentin Weigel 1533-1588）にフランク（Sebastian Franck 1499-1542）を加えた4人を「ベーメの思想体系の予備的考察*4」のために研究し、『ヤコブ・ベーメの哲学』（La philosophie de Jacob Boehme 1929 本邦未訳）へと繋げた。

*1高山信雄「コウルリッジとドイツ文学（二）——コウルリッジとヤコブ・ベーメ」

『法政大学教養部紀要』57号, p17-42, 1986-01、30頁

*2藪田坦『無底と意志—形而上学 ヤーコブ・ベーメ研究』創文社、2015、162頁

*3岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコブ・ベーメ研究』昭和堂、2012、127頁

*4アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、1987、27
9頁

パラケルススについてはすでに第一章で触れたので、以下ではコイレの研究に沿ってほかの3人の思想を整理する。

シュヴェンクフェルトはシレジア地方に生まれ、ルターに感化されて宗教改革を担った。だがやがてルターのもとを離れ、新教旧教双方から異端の嫌疑をかけられながらも自身の信仰を展開した。彼の思想は特に地元シレジアで多くの支持者を得た。彼は神学の分野では一介のディレクタントにすぎぬ独学の平信徒であり、その思想は宗教改革の本流と袂を分かって以降ルターによって飽くことなく否定され攻撃されたという^{*1}。

「カスパー・シュヴェンクフェルトは、大半の同時代人とはまったく別のことを望んでいたのである。彼が救いとよんでいるのは、罪からの『解放』などではなかった。神的となること、テオーシスなのである。人間が神になること、これが彼にとっては、神の最終目標なのである。^{*2}」

「シュヴェンクフェルトにとっては、後のベーメと同様、身体を持たない純粋な霊などというものはナンセンスである。内なる人間は十全な人間である。そしてそうした人間こそが、キリストの同類であり、神化され変容されて神の栄光の享受者となる者なのである。^{*3}」

人間が神になる、人間と神との合一というのは、ドイツ神秘思想の源流に沿うものである。しかしシュヴェンクフェルトはエックハルトやタウラーのようなよく知られた神智学者と違い、優れた教育を受けた人物というわけではなかった。独学の思想家であり、紳士的で、純粋で、優しい宗教改革者だったという^{*4}。後述するベーメの人物像とどこか似ていないだろうか。

ベーメが靴職人の親方となるための遍歴を行ったのは十代の後半であったと推測される。岡村康夫の指摘するように、このシレジアへの旅と、その際にできた友人関係を通じて、

*1アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、14-16頁

*2同上、28-29頁

*3同上、36頁

*4同上、16頁

ベーメがシュヴェンクフェルトの思想を吸収した可能性は大いに考えられる。シュヴェンクフェルトを知るという経験は、さらにフランクやヴァイゲル、パラケルススを知るきっかけにもなったことだろう。

フランクはシュヴェンクフェルトと同じく宗教改革の初期を担った人物である。そして彼もまたシュヴェンクフェルトと同様にルターと袂を分かった^{*1}。コイレ曰く、フランクは読書家であり、教会教父、ドイツ神秘家、宗教改革者など多くの著者に触れながら、それら思想を統一させるのではなくアマルガムのように融合させた人物であるという。「借用してきた諸々の主張や教説を、一つのそれなりに整合的な構想の下に鑄直すことを知っていた^{*2}」彼の著作は、あらゆる霊性家のサークルの中で読み継がれ、編纂され、伝えられた。コイレは「ベーメも彼を読んでいた^{*3}」と推測している。

ヴァイゲルはルター派の総本山ヴィッテンベルク大学で学んだマイスターであり、チョッパウの牧師を務め、その地で没した。コイレ曰く「彼の書物は非常な稀覯本であり、加えてすでに十七世紀から知られていたように、彼の名を冠して刊行された著述の相当部分は明らかに彼の作品ではない。^{*4}」という状況にあった。しかしその思想は「十六世紀の全ドイツをまきこんで争っていた様々な思想潮流の最初の総合を、あるいは総合の試みを^{*5}」示しているという。神秘主義思潮、呪術的＝錬金術的思潮、宗教改革から生まれた思潮、シュヴェンクフェルトやフランクを含んだ霊性主義的思潮がヴァイゲルの著作において総合を試みられた。ベーメへの影響についてコイレは、皮肉にも偽作とみられる著作において「七つの世界の支配者ないし神の諸霊（すなわち七つの惑星）^{*6}」の理論が語られており、「この七惑星理論にベーメの七つの源泉＝霊の思想の原型を見てとることはたやすい^{*7}」と言っている。また、三位一体に神の知恵を加えた「四位一体」とでもいうべき観

*1アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、59頁

*2同上、64頁

*3同上、92頁

*4同上、195頁

*5同上、196頁

*6同上、237頁

*7同上、237頁

念が提示されており^{*1}、これはベーメの後年の著作に登場する乙女ソフィアの原点になったのではないかと推測できる。

七つの根源については、ユダヤ神秘思想カバラの教えを継承・改造したものであると指摘した研究を福島が紹介しており^{*2}、複数の由来が考えられる。しかしヴァイゲルを読むことで様々な思想潮流と接することができたということは間違いない。

この3人に共通の論点として、コイレは霊と文字の対立を挙げている^{*3}。彼らは魂に対する神の無媒介の働きかけを主張する。キリストを内なるロゴスと同一視する。「真のキリスト教会、普遍的なる教会とは、一定の、制限された教派ないし教団に所属する人々で構成されるものではありえない。そうではなく、あらゆるところに、あらゆる教会教派のうちに、あらゆる信仰形態のうちに、[……] いたるところに真のキリスト教徒は存在している^{*4}」というのである。各宗派が睨み合う地域に生まれたベーメの眼には、この考え方は魅力的に映ったのではないだろうか。

ベーメが暮らし、また旅したオーバーラウジッツやシレジアには、彼を神秘主義へと導くことになる思想と、その存在を認める宗教的許容があった。では、このような文化圏にあって、ベーメはどのような人生を送ったのだろうか。

2.ベーメと身体・病

ヤーコプ・ベーメは1575年、現在のポーランド西部にあたるオーバーラウジッツ地方の小村アルト・ザイデンベルクに生まれた。かつては貧しい生まれだったという理解があったようだが、現在は否定されている。祖父は比較的裕福な農夫であり、父は村の教会の世話役を務めたという血筋だったようだ^{*5}。しかし1679年のペストを体験したウィーンの宮

*1アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、風の薔薇、236頁

*2福島正彦『ベーメ倫理思想の研究』1984、松籟社、107-108頁

*3アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』鶴岡賀雄訳、1987、風の薔薇、199頁

*4同上、199-200頁

*5岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、137頁

福島正彦『ベーメ倫理思想の研究』松籟社、1984、22頁

廷説教師サンタ・クララが、農民階級の貧しさを、町の労働者よりもさらに貧しいと書いており^{*1}、アルト・ザイデンベルクにおいても、かつてベーメがそうであったと考えられていたような貧しい農民が多くいたことは間違いない。ベーメが都市部ではなく農村で育ったということは見逃せないポイントである。第一章で述べたように、農村にとって疫病は集落そのものの死に繋がる災禍であった。疫病への恐怖や偏見は、都市部よりも強かったと推測できる。

ベーメは先祖代々の農地を相続することなく、1589年頃にザイデンベルクの靴職人の親方に預けられた^{*2}。当時14歳前後。身体が弱かったため、農民として不適とされたらしい。ベーメには兄が2人いたので、少なくとも彼らと比べれば体質が弱かったというのは間違いないのだろう。もっとも、この2人の兄はベーメよりも短命で、少なくとも1618年には亡くなっていたと推測される。この年に父の農地をベーメの弟が相続しているからである^{*3}。

ベーメは3年の徒弟奉公と3年の遍歴を終え、1594年からゲルリッツの靴屋で従業員として働きはじめる。遍歴の旅を滞りなく終えていることに注目したい。5年後の1599年、24歳のときに親方として独立し、ゲルリッツの市民権を得た^{*4}。順風な人生のように見える。後年には行商の傍ら精力的に執筆もしており、虚弱な人物という印象は薄い。成長するにつれて体質が改善されたのだろうか。ベーメが周囲に与えていた身体の弱さとは何に起因するものなのか。

この論文では、ベーメの著作と現実世界のペストとを関連させるという都合上、ベーメの身体状況や知覚が彼の神智学的ヴィジョンに反映されているものと仮定している。この仮定を証明する術はないが、以下にベーメの肉体的精神的状況が彼の著作に影響を及ぼしている可能性を指摘している研究を2つ紹介することで、説得力の強化をはかりたい。

コリン・ウイルソン（Colin Wilson 1931-2013）はベーメとドストエフスキーを関連づけて、「ベーメには、存在する一切のものを善しと是認し、『あらゆるものを肯定できるとい

*1ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳、白水社、1997、92-93頁

*2岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、138頁

*3同上、137頁

*4同上、138-139頁

う気持』がある。それは、ドストエフスキーが持病の癲癇発作に陥る直前に経験するのが常であった全宇宙的な幸福感と共通のものであった^{*1}』と語っている。ウイルソンはさらに、この全宇宙的な幸福感=エクスタシーに到る過程の構造もまた、ペーメとドストエフスキーでは同一であるとしている^{*2}。ペーメが癲癇持ちであったとは言及していないが、ペーメの神秘体験が癲癇発作と極めて似た経緯を辿っていると言っているのである。

25歳のときに起こった「決定的な15分」以後、ペーメは大規模な、あるいは高密度な神秘体験をしていないと考えられる。これについて岡部は「ペーメに霊眼が開いた。^{*3}」という表現を用いて以下のように言っている。

「彼は、十五分だけ霊の世界を見て、その後その恍惚状態から殺伐とした現実を引きずりもどされたのではない。彼は、神の永遠の世界を見る目を、神との婚姻体験によって得、しかもその霊眼は終生失われることなく彼に備わりつづけたのである。^{*4}」

眼に映るすべてのものが、そのものへの認識が、「決定的な15分」の前後でまったく変わってしまった。そのためにペーメにはもはや大規模な神秘体験は必要なかったのだろう、と岡部は推測しているようである。

ここで、ペーメが小児癲癇の持ち主であり、そのために体質が弱いとされていたのではないか、と想像してみよう。成長とともに発作の回数は減っていき、彼は遍歴も全うするほどになる。しかし25歳、彼は初子の誕生という一大事によって宿命的なメランコリーに陥り、久しく忘れていた発作を起こしてしまった。その後の彼の人生には、33歳での次男の夭折以外には目立った事件は起こっていない。そして次男の死の際には、ペーメはほかの子供達のために働かねばならない立場にあり、憂鬱に浸る暇はなかった。このようなストーリーがすぐさま浮かんでくるほどに、神秘体験と癲癇との関連づけは興味深いもので

*1福島正彦『ペーメ倫理思想の研究』松籟社、1984、194頁、引用部分は福島からの孫引き

*2同上、198頁

*3岡部雄三『ヤコブ・ペーメと神智学の展開』岩波書店、2010、39頁

*4同上、39頁

ある。

コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834) もまた、ベームのヴィジョンを彼の精神状態と関連させた人物である。高山はコウルリッジ論のなかで、「ヤコブ・ベームの心は、夢によって十分に説明される——」というコウルリッジの言葉を引用し、「これはコウルリッジの言う幻想夢の状態が、ベームの天啓を受けるときの精神状態と非常に似ているものであることを裏付けるものであろう。^{*1}」としている。18世紀末から19世紀初頭にかけて活躍したコウルリッジは、科学的な思考をもって物事に臨んだひとであったので、「神」ではなく「夢」という、より現実的な事象を念頭にベームを読み解いたのである。この態度は、ベームが実際に何らかの特殊な体験をしたのだと認め、それを異常な身体的・精神的状態に結びつけているという点において、ウィルソンの視点と似ている。ベームと神、あるいはベームが神と呼んでいるものとの繋がりが直接的なものであったなら、そこにベームが見聞きした現実世界の様相が入り込む余地は少ない。しかし二つの間に人間の身体が挟まれているならば、ベームの体験した神の世界は彼の身体を通して認識されたことになるので、彼の著作には人間的な感覚が反映されていると考えることができるはずだ。この論文では、ウィルソンやコウルリッジと同様に、後者の立場で考察していく。

ベームは1624年に病死している。病名については定かではないが、肝臓疾患と心臓衰弱が死因であったと推測されている^{*2}。ベームは1620年にイエーゲルンドルフ伯の軍隊がゲルリッツに駐留した際、兵士から感染症をもらって6週間床に伏せた^{*3}。それ以降調子が優れなかったようである。この感染症が何だったのか確たる記録はない。しかし特別な記録が残っていない以上、ペストや発疹チフス、天然痘、癩病でないことは確かだろう。こうした特徴的な伝染病にかかっていたならば、彼は神の怒りに触れたのだと後世に伝えられているはずだからである。また、幼少期にこれら伝染病に罹患したと考えることも難しい。多くの伝染病、特にペストや天然痘、麻疹は、治療跡や痘痕を残すためである。彼がひとに好かれる人物であったことには反論の余地がない。無学な靴職人に過ぎなかった彼が地

*1高山信雄「コウルリッジとドイツ文学（二）——コウルリッジとヤコブ・ベーム」

『法政大学教養部紀要』57号, p17-42, 1986-01、27頁

*2岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーム研究』昭和堂、2012、171頁

*3福島正彦『ベーム倫理思想の研究』松籟社、1984、68頁

方の有力者にすら知己を得ていたのだから、彼の身体の弱さ、既往歴は少なくとも彼の人間的魅力を引き下げる方向には働かなかったはずだ。ただし、彼が美男子でなかったことも確かである。ペーメを神話的に描くフランケンベルク著の伝記にすら、ペーメは風采の上がらない容貌で書かれているからである。

無学で見てもよくないが、敬虔かつ熱心なキリスト教徒で、よく本を読む、ひとのよい靴職人。これが、青年期以降のペーメの姿であった。

3.ペーメとペスト

第一章で述べたように、ペストは近世においても依然として脅威的な存在であった。ペーメが住んだゲルリッツでも、1585年から86年にかけて大規模な流行があり、少なくとも2455人の人命が奪われたという。流行以前のゲルリッツの全人口は9069人であり、この2年でほぼ四人に一人が死亡したことになる。ペストはその後にも1599年、1607年、1612-1614年に流行した^{*1}。

まずは1599年という年に注目したい。この年の4月にペーメは靴屋の親方としてゲルリッツの市民権を獲得した。また市民権の獲得者は半年以内に結婚しなければならなかったこともあり、5月に結婚している。8月には家を購入した^{*2}。一般的にペストは冬季には鈍り、春から夏にかけて猖獗を極める。1599年のペストは、ペーメがゲルリッツに腰を据えんとしていたまさにその最中に流行していた可能性が高い。また、翌1600年1月には長男が生まれ、同じ年にはかの決定的15分間を体験している。長男の誕生と決定的15分間については時系列が定かではないが、長男が1月29日と年明けすぐに誕生していることもあるので、この論文では基本的には神秘体験をあととして考える。順番が前後していても、もうすぐ子供が生まれるというのははっきり分かったはずなので、後述する神秘体験のきっかけについての考察に矛盾は発生しない。

神秘体験と長男の誕生。この二つの関係については、福島も指摘している^{*3}。1599年のペスト流行の最中に独立開業、結婚、転居を果たし、翌年には第一子が誕生した。このよ

*1福島正彦『ペーメ倫理思想の研究』松籟社、1984、43-44頁

*2岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ペーメ研究』昭和堂、2012、139-140頁

*3福島正彦『ペーメ倫理思想の研究』松籟社、1984、30頁及び48頁

うな人生の大変動が、無力で無学な靴職人を著しいメランコリーへと導いた。このときのことを、ベーメは以下のように語っている。

「しかしまた私はあらゆる事物のうちに悪と善があることを、諸元素のうちでも、もろもろの被造物のうちでも、そうであるのを見出した。私はまた、およそこの世では神無き人にも敬虔な人と同じように事はうまく進み、それゆえ無信仰な人々が最善の地を占め、敬虔な人々以上に彼らに幸運が多く恵まれることになるのを見出した。^{*1}」(第十九章八節)

「それゆえ私はすっかり憂鬱になり、まったく暗然たる気分となった。私がおよそ熟知していたどんな書き物も、私を慰めることはできなかった。^{*2}」(第十九章九節)

ペストが差別なくあらゆる命を奪っていったことは第一章で述べたとおりである。無信仰な人間が平然と生き残り、遺産によって財を築くこともあれば、信心深い人間が一家もろとも滅びることもあった。無信仰な人間に善があり、信心深い人間に悪があったということなのか。憂鬱の中で、ベーメの善と悪の問題が深化していった。

もちろん、ベーメの言う「あらゆる事物のうちに悪と善があるのを見出した」というのはペストのみを問題にしてのことではないだろう。オーバーラウジッツ地方に新教と旧教の対立、新教の中でもルター派とカルヴァン派の勢力争いがあったことはすでに述べた。どこにでもある近隣住人や職業仲間との諍いに悩んでいたという可能性もある。しかし1600年のゲルリッツを思えば、彼の言う悪の中でペストが少なからぬ地位を占めていたと考えてもよいはずである。

親方になるための遍歴生活と1599年のゲルリッツでのペスト流行において、ベーメは多くの死を目の当たりにした。病死者の中には子供も多くいたことだろう。長男が生まれたとき、自分の子供がそれに巻き込まれることを想像しないでいられただろうか。どれだけ神に祈ってもペストが無慈悲に訪れることを、ベーメと彼の同時代人は悟っていたと考えられる。命の危機と信仰の危機、さらに家族の危機を間近にしたとき、ベーメは宿命的な

*1 『アウローラ―明け初める東天の紅』 蘭田坦訳、創文社、2002、280頁

*2 同上、280頁

メランコリーへと陥ったのである。

ゲルリッツでは、1607年に再びペストが流行してる。ペストは冬季には足を鈍らせるので、流行はこのタイミングで収束しやすい。ベーメの次男が亡くなったのは翌1608年の3月である。しかし流行の収束即ち患者数0ではないので、この時差は不自然なものではない。

次男が亡くなった際にベーメ一家が住んでいた家は、現在も残されている。打ち壊されたり、焼き払われたりしていない。それどころか、この家は当時好立地が評価されて買値よりも高く売れたらしい。ベーメは次男を亡くして半年も経たない7月にこの家を売却し、しばらく賃貸人として住んだあと、1610年に新居に移った。新居は商売をするには前の家よりもさらによい場所であったらしい。だが、この家に引っ越してわずか2年でベーメは靴屋を廃業している^{*1}。好立地で順風な職人生活を営んでいたベーメが新居に移ったのは、商売だけが理由なのだろうか。それならば何故2年で靴屋を廃業したのか。ベーメは『アウローラ』で神の世界を絶賛しているが、それなら何故素晴らしき決定的15分間を体験した家を手放したのか。家を離れることが前提であったかのように、売り払ったあとも新居が決まるまで賃貸人として住んだのは何故なのか。次男の死と全くの無関係だと言い切れるだろうか。

ベーメは『アウローラ』の中で、家についてこんな言葉を残している。

「彼（ルチフェル *筆者注）は光の家から闇の家を作り、また喜びの家から悲しみの家を、喜悅と爽快の家から渴望と飢餓の家を、[……] 平安の家から永遠の苦悩と号泣の家を、笑いの家から慄きと恐れの家を、[……] それぞれ作るのである。そしてこの悪魔こそは、神とその天使たちと、また悪魔を討つ天上の全軍勢に対する敵意なのである。^{*2}」（第十六章二七説）

ベーメの死後には、彼の四男と妻もペストで亡くなっている^{*3}。ベーメとその家族は、当時のゲルリッツの人々が皆そうであったように、ペスト禍の真っ只中で生活をしていた

*1岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、146-147頁

*2『アウローラ—明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、237-238頁

*3岡村康夫『無底と戯れ—ヤーコプ・ベーメ研究』昭和堂、2012、141頁

のである。喜びの家が悲しみの家へと変わるきっかけとして、ペストは決して珍しいものではなかったのだ。

ベーメは神秘体験以来、「ただ自分自身のため、メモのために」のちに『アウローラ』となるものを綴っていたが、1612年頃本格的に手をつけはじめ、5ヶ月ほどで草稿として書き上げた^{*1}。『アウローラ』の中に以下の記述がある。

「けれども私は、すぐさま神の深い誕生をその本質において把握し、私の理性において把握することはできなかつたので、私に正しい理知が与えられるまでにはほとんど十二年の歳月が経過した。^{*2}」（第十九章十四節）

黒死病で父を失ったボッカッチョが『デカメロン』を完成させたのが1453年。ペストがイタリアに到来して6年が経っていた。こうした歳月は、近いものの死を消化するのに必要とされる時間なのかもしれない。また、ゲルリッツで1612-1614年に再びペストが猛威を振るったことにも注意しなければならない。ペストの流行がベーメを『アウローラ』へと向かわせたと思像することもできるのである。

『アウローラ』以降教会に断筆を誓っていたベーメが再び筆を執り始めたのは、三十年戦争の始まった1618年である。ベーメはこの時代を「混乱した不幸な悲哀に満ちた時代^{*3}」と嘆いている。ゲルリッツも三十年戦争で損傷を被った。この戦争はベーメにとってまったくの目前で起こった出来事であった。往々にして軍隊の移動は疫病を広める。軍隊への不安は疫病への不安でもある。実際にベーメは、ペストではないが、1620年に兵士からの感染と思われる病で6週間床に伏せた^{*4}。ただの靴職人であった彼は、「戦争や悪疫を外的に克服しうる何の手段も知らなかつた^{*5}」のであり、従って魂そのものの内面にそれを求めるほかなかつた。それが執筆再開へと繋がつたと福島は考えている。ならば『アウ

*1 藪田坦『無底と意志－形而上学 ヤーコプ・ベーメ研究』創文社、2015、8-9頁

*2 『アウローラ－明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、281頁

*3 福島正彦『ベーメ倫理思想の研究』松籟社、1984、40頁

*4 同上、68頁

*5 同上、47頁

ローラ』の執筆動機もまた、何かを克服するためだったと仮定できないだろうか。その何かとは、近世の神学・医学・錬金術では太刀打ちできない、人命を根こそぎ奪っていく疫病であったと考えることもできるだろう。なお、ベームと家族という面に注目して、執筆再開の1618年に父ヤーコプが亡くなっていることにも付言しておく。

ベームは神の世界のことを人間の言葉で表すことはできないと語っている。彼は言わば神の世界を人間の世界に翻訳しているのである。彼が現実の世界で体験したすべての出来事は、著作において神の世界を表現するための道具となっている。『アウローラ』時点での彼の人生において、ペストがどのようなウェイトを占めているかは、上述の通りである。

4. 『アウローラ』における病

ベームは「悪と禍の起源」を問い続けたひとであった。全知全能であるはずの神の創った世界に何故悪が存在するのか。これは何時いかなる時代にも問われてきた神学上の重大問題である。ゾロアスター教やマニ教は、悪を実体的なものとしてとらえ、善と悪との闘争を物語る善悪二元論にその解を見出した。アウグスティヌスも大いに影響を受けたという新プラトン主義は、悪の実体を否定し、善の不在という一元論的な答えを導き出した。近世を生きたベームは、この両者を包括するかのよう、「単なる二元論者でもなく、また単なる一元論者でもない。^{*1}」思想を展開した。これが、神でありながら神それ自体をすら飲み込む「無底」の概念である^{*2}。この従来 of キリスト教神学に縛られぬ自由な発想は、彼が一人の無学な靴職人であったこと、そして真摯なキリスト教的生活を送った人物であったことに由来すると岡村は見ている^{*3}。

現実の世界を「悲の谷」と称したベームである。当時のすべての庶民がそうであったように、彼はこの世界の悪から逃れることはできなかった。それは彼自身の身体の弱さとして、遍歴の最中に見たであろう荒れ果てた土地として、ゲルリッツに荒れ狂うペスト禍として、宗教間での争いとして、彼の前に現れた。ベーム神学は、こうした現実の悪をいかに解釈していったのだろうか。まずは疫病一般に対するベームの態度からそれを検討して

*1岡村康夫『無底と戯れーヤーコプ・ベーム研究』昭和堂、2012、5頁

*2同上、4-5頁

*3同上、25頁

いく。

ベーメの病観が分かる部分を『アウローラ』から引用する。

「見てほしい。人間は患い、病む。そしてよい手立てが講じられなければ、彼は死に陥るが、それは地から成育する苦いおよび渋い草木によって、あるいはまた死をもたらす水やさまざまな地の草木、さらには悪い肉ないしその腐臭によってももたらされる。^{*1}」(第二十一章一一一節)

「ところが今ひとりの賢明な医者がいて、この病人を診てその害毒が何からきているかを調べ、その病気の原因を——それが肉であれ、草木であれ、あるいは水であれ——取り出す。そしてこれをその素材に適合した仕方に応じて蒸留または燃焼させて粉末にし、死をもたらす最も悪い毒を焼き尽くすとする。こうしてあとには、その水あるいは粉末のなかに天空の誕生がその座のうちに留まり、そこでは生と死が互いに争い合い、そしていずれもが昂揚する。なぜなら死せる身体は立ち去ったからである。^{*2}」(第二十一章一一二節)

中近世の人々にとって、病とは神の怒りや星の動き、大気の腐敗によってもたらされるものであったことは第一章で述べた。一方ベーメは、大気の汚染のみならず、水や草、肉といった身近なものも疫病の原因として挙げている。現代を生きる人間にとって、これは自然科学的な見方のようにも感じられるかもしれない。しかしベーメは錬金術に傾倒こそすれ自然科学者ではまったくなかった。上記の病観はむしろ彼の神秘思想を表すものであると考えられる。ベーメにとっては、極言するなら、この世界に存在するすべてのものは神の怒りを内包しているのである。何故ならこの世界そのものが神の怒りとルチフェルの墮落にその根源を持つからである。この理解に従うならば、ペストもまた神の怒りをその源に持つのであり、ペストから神の怒りへと遡ることもできるということである。ベーメの世界理解については、この論文の第三章で詳しく述べる。

また、ベーメの身体観が分かるものに以下のような描写もある。

*1『アウローラ—明け初める東天の紅』 蘭田坦訳、創文社、2002、333頁

*2同上、333-334頁

「後者の人たち（解剖学者や人体＝解剖家たち 筆者注）は、人体解剖によって人間の生命の始源と現出を知ろうとし、こうして神と自然の法と掟に反して多くの罪無き人間たちを殺害してきた。*1」（第二十六章四一節）

この言葉は、ベーメの生きた時代、解剖が何も生み出さなかった、それによって何も発見できなかったという事実を反映しているものと考えられる。医師と言わずあえて解剖学者と呼んでいるのは、当時ペストの治療に当たっていたのが外科医であったことが影響しているのかもしれない。

5. 『アウローラ』におけるペスト

ベーメの著作において、ペストは直接的にはどのように描かれているのだろうか。この節では、主著『アウローラ』における"pest"を一つ一つ取り上げる。

まず第一章に早速ペストへの言及が登場する。ベーメは熱を大気、冷たさを水と関連させたうえで、「肉においてであれ、あるいは地中から生育するものであれ、すべての物の身体は水において成り立ち、霊は大気において成り立つ*2」（第一章十五節）とする。この水と大気という2つの性質にも、善と悪の二つの相、即ち生の作用と死の作用が認められる*3。そして苦い性質の憤激性が水の元素のうちに点火し、湧出するとき、「それは肉を衰弱と疾病にもたらし、最後はやはり死へと到らせる*4」（第一章二一節）という。これがベーメの描いた最初の病の描写である。

すでにこの時点で、肉や大地を構成する要素が善とともに悪をも孕んでいるという、ベーメ特有の思想が表れている。憤激性によって死の作用が発生するという点に、悪疫は神の怒りによるものであるという、中近世の原因論の影響が見て取れないだろうか。

この直後にペストが登場する。まず、神の七つの霊の一つである甘い性質を「苦い性質

*1 『アウローラ―明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、410頁

*2 同上、28頁

*3 同上、第一章十六節、28頁

*4 同上、29頁

に相対立するものであり、優雅な愛らしい性質、生命を爽快化するもの、憤激性を鎮静化するものである。^{*1}」（第一章二二節）と説明したうえで、この性質の悪の相を以下のよう

「他方またそれ（甘い性質 筆者注）は憤れる源、死と潰敗の源をもそのうちにもつ。というのも、それが苦い性質のうちで水の元素において点火されるとき、その性質は疾病やペストの浮腫（aufgeschwollene Pestilenz）や肉の腐爛を生み出すからである。逆にそれが熱と苦味性のうちで点火されると、その性質は大気元素に伝染し、そこから急性の伝染性のペスト（fliegende Pestilenz）を生み出し、急激な死をもたらすことになる。^{*2}」（第一章二二節）

これがベーメが記した最初のペスト観である。彼が腺ペストと肺ペストを明確に識別していた、と決めつけることはできない。第一章で述べたように、“Pestilenz”とはベーメの生きた時代においては単に疫病を示す言葉であり、“fliegende Pestilenz”が肺ペストを示すとは限らないからである。例えば粟粒熱は急性に症状が進展し死に到るし、本格的な流行は産業革命以後であるとはいえ、インフルエンザもまた伝染性の症状を呈する。大気が汚染されるという感染の仕方も、当時の疫病一般に言われていたことであり、ペストのみがこの特徴を持つと考えられていたわけではない。ただもちろん、16世紀半ばを最後に姿を消した粟粒熱をベーメは体験していないし、インフルエンザも現代ほど爆発的な影響力を持っていなかったことは考慮しなければならない。

一方で“aufgeschwollene Pestilenz”は腺ペストを示していると断定できる。それに続く肉の腐爛は癩病と推測される。1583年にオーストリアの医師がまとめた文献において、腺ペストは腺腫に、癩病は血液の腐爛に結びつけられている^{*3}。また腺腫は、この時代によく見

*1 『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、29頁

*2 『AURORA』1977 Gerhard Wehr 編 Aurum Verlag、59頁

『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、29-30

*3 ヒルデ・シュメルツァー 『ウィーン ペスト年代記』 進藤美智訳、白水社、1997、132-133頁

られた発疹（Ausschlag）を伴う病とは区別されていた。ベーメにとって"aufgeschwollene"病とは腺ペストであったはずである。

ベーメは甘い性質を「あらゆる被造物においてすべてを愛らしく、また好ましくする。^{*1}」（第一章二二節）と規定しているが、同時にそれは「憤れる源、死と潰敗の源をもそのうちにもつ^{*2}」（第一章二二節）のである。そして、この二つの相の入れ替わるきっかけは「憤激性」であり、「点火」である。

ベーメにとって水はすべての物の身体を成り立たせるものである。甘い性質は水を爽快化し、憤激性を鎮静化する力を持っていた。しかしこれらが憤れる源となり点火されるとき、腺ペストや癩病が生み出されるのである。ベーメ思想が晦渋とされるのには、憤激性を鎮静化するはずのものが憤激性の源を持つ、という、矛盾を孕んでいるようにしか見えない描写が一因となっている。この矛盾はベーメの「自由」と「無底」の問題を解いていくことで、またベーメが執拗に論じるルチフェルの墮落の問題を考えることで解消されることを西谷啓治が明らかにしているが、この論文では触れない^{*3}。

近世においては、腺ペストに対して中世以来の瀉血法にかわって打膿法が用いられることがあった。これは患者のブポー（ペスト特有の浮腫）をメスで打ち破り、内部の膿を出し切ることを目指すものであった。ブポーは拳大に膨らむこともあったため、これが破れた場合大量の膿が流れ出した。肉が溶けたとしか思えぬ状態であっただろう。この様子とその悪臭とが、水-甘い性質とペストとの関連をベーメに植えつけたのかもしれない。

ペストは次に第八章に現れる。この章でベーメは、神的なサルニテルを形成する相を順に説明していく。このサルニテルを形成する相とは、上述の甘い性質がそうであったように、神の七つの霊の別の呼び名である。第三の相として苦い性質が説明される。苦い性質は生命が発動するものであり、第一の霊であり、まさしく心胸であるとベーメは評価する。甘い性質のうちで、苦い性質は穏和になり、愛に満ちあふれる。だが、善のままでは終わらない。

*1 『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、29頁

*2 同上、29頁

*3 板橋勇仁「『自分は自分である』ことと『我性』への『想像/構想』：西谷啓治によるヤコブ・ベーメの思想への理解とその射程」 『哲学論集』 41号, 73-96, 2012、参照

「それがあまりにも高められ、動かされ、あるいは点火される時、それは甘い性質と渋い性質に点火し、自ら引き裂き、突き刺し、燃え上がる毒のようである。それはちょうどある人が引き裂くような悪性の腫瘍（pestilenzbeule）をもち、その痛みにもめき叫ぶときのようなものである。^{*1}」（第八章二八節）

"pestilenzbeule"は悪性の腫瘍、疫病の腫れ物である。従ってこれは腺ペストを示していると考えられる。ブポーは首や腋下などリンパ節に形成され、それ自体が不愉快な存在であった。皮膚の強ばりによって鋭い痛みが起こったようである。しかし引き裂くという描写はブポーと直結しないようにも見える。

多くの場合、ブポーはあまりにも硬く、打膿法を施そうにも刃物は簡単には通らなかった。硬く腫れ上がったブポーを無理矢理にでも破ろうとして、治療の痛みのために発狂した人物をデフォーは『ペスト』で描いている。内部の膿を放出すれば回復するという経験則があったため、人々はこれにすがろうとしたのである。実際には、症状が軽い患者のブポーは破ることができた、というに過ぎないのだろう。腫瘍の痛みもさることながら、治療にも多大な疼痛を伴うのがこの時代のペストであった。引き裂く、突き刺すといった描写には、ベームが見聞きしたペスト患者の様子が反映されているのではないかと推測できる。この硬さと柔らかさ、難治と快癒については、この論文の第三章において触れる。

続いて第八章の最後にも悪疫という言葉が出てくる。

「けれども私はあなたがたを悪疫の椅子（Stuhl der Pestilenz）に座らせ、そして私の牧者が私の子羊たちを養うことになろう、と。^{*2}」（第八章一〇八節）

この"Pestilenz"は一般的な悪疫を指しているものと考えられる。ベームは「悪疫の椅

*1 『AURORA』 1977 Gerhard Wehr 編 Aurum Verlag、117頁

『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、92頁

*2 『AURORA』 1977、Gerhard Wehr 編、Aurum Verlag、131頁

『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、108頁

子」と対比させて「モーセの椅子」を登場させているので、「恩寵」と「悪疫」という反対語の意味を込めて"Pestilenz"を使ったのだろう。当時の"Pest"が現代のペストと違った使い方をされていたことを示す一例である。

第九章のはじめには"plage"という単語が現れる。

「そして神は悲惨な者のことを忘れてしまったので、このように彼を苦しめるのだ (darum plage er ihn also) と思い込む。^{*1}」(第九章二節)

災難や打撃を意味するラテン語"Plaga"が"pest"の語源であることはすでに述べた。現代英語において疫病を表す"plague"もまた"Plaga"の変形である。ドイツ語においては"Pest"が疫病の意味を引き受けたので、ここに現れる"plage"は藪田の訳文のように災難・打撃として見るのがよさそうだ。この意味の"plage"は第十七章、第十八章にも登場する。

第十章の終わりに、ペストは再び登場する。

「(3)苦味性はペストのごとく引き裂き (hitzige Pestilenz)、また胆汁のように苦い。^{*2}」(第十章六五節)

この"hitzige Pestilenz"も明確にペストと結びつける根拠は薄い。しかしベーメは第一章で苦い性質とペストを結びつけているので、この部分でも同じ病を想定して書いたと考えることもできる。

主著『アウローラ』において、実際に"pest"という単語が用いられた部分は以上である。数は多くないが、ベーメが作品にペストを登場させていることは間違いのない事実である。このことを考慮のうえ、ベーメ神学における天地創造を考察する。

*1 『AURORA』 1977、Gerhard Wehr 編、Aurum Verlag、133頁

『アウローラ—明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、109頁

*2 『AURORA』 1977、Gerhard Wehr 編、Aurum Verlag、154頁

『アウローラ—明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、133頁

第三章 天地創造とペスト

1.神の七つの霊

ペーメは『アウローラ』の中盤をルチフェルの墮落の解釈に、後半を天地創造のそれに当てているが、これは話題を変更したわけではない。ペーメにおいては、人間の生活するこの世界はルチフェルの墮落なくして誕生しなかったものであり、この2つはまったくの地続きなのである。ペーメの神学観に基づいたペストの発生を考察するには、こうした天地創造のプロセスを理解しておく必要がある。この節では、ペーメ神学の根幹を成す概念である「神の七つの霊^{*1}」を『アウローラ』の記述に沿って整理する。

七つ霊の内訳は「渋い霊」「苦い霊」「甘い霊」「不安＝熱」「愛」「音あるいは響き」「体」である。場面によっては「渋い霊」が「渋味性」と呼ばれるなど、様々に名前を変えながら登場しているが、役割についてはどの場面でもほとんど共通である。即ち神の手足となって働く力あるもの、あるいは力そのもの、というものである。

ペーメは天地創造の場面において、七つの霊を以下のように区別している。

「あなたはしかし、地は七つの根源霊のすべてをもつことを知るべきである。実際、悪魔の点火によってもろもろの生命の霊はともに死のうちに一体化され、死滅されてはいないが、いわば掴まえられているのである。^{*2}」（第二十一章一〇一節）

「初めの三つ、すなわち渋味、甘味、苦味は、体の形成に属している。そしてそれらの中に可動性と身体が存立する。それらは今や可動性をもち、また最も外的な自然の誕生である。^{*3}」（第二十一章一〇二）

「次の三つ、すなわち熱、愛、音は、把握不可能性のうちにあり、最初の三つから産まれる。そしてこれが今や内面的な誕生であり、神性はこれと同質化する。^{*4}」（第二十一章一〇三説）

*1『アウローラ—明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、328頁ほか

*2同上、332頁

*3同上、332頁

*4同上、332頁

ここでの生命の霊とは個人の霊と考えて差し支えないだろう。ルチフェルの墮落と神の怒りによって、生命の霊には死が一体化されることになり、このために人間には把握不可能になってしまった根源霊が存在しているとベーメは言っている。人間に把握できるのは、「体の形成に属している」渋い霊、甘い霊、苦い霊によって形作られたものだけである。この「最も外的な自然」のみを我々は認知して生活している。従ってペストのような疫病もまた、それが人間によって認識される以上、この三つの霊によって形成されているということになる。ここが、ベーメの神学観に基づいてペストを理解するための一つのポイントである。人間が認識することのできる三つの霊について、ベーメは以下のように解説している。

渋い霊とは「地のうちにある質量を凝縮し、これをその鋭い冷たさによって乾燥させる。この霊は、ちょうど水を凝縮させ、そこから氷を作るように、また水を地のうちでも凝縮させ、そこから乾いた質量を作る。^{*1}」（第二十一章七三節）ものである。後述するが、この渋い霊が世界を再誕させた霊であると考えられる。ベーメは著作において、この霊を乾燥、凝縮、強い霊といった言葉と関連させている。

苦い霊とは「そこから生命が発動し、可動性が起源する第一の霊であり、まさしく心（Cor）あるいは心胸と呼ばれる。^{*2}」（第八章二八節）また別の章では「聖霊はこの性質のうちで強力に立ち働き、駆り立てる。というのも、この性質は [……] 天上の歓喜の国の一部分をなしているからである。^{*3}」（第一章二一節）これらの記述から、苦い霊は七つの根源霊の中心になるものであり、聖霊に近い位置にあることが推測できる。

甘い霊とは「渋い性質のうちで作用し、渋い性質を穏和にし、それがまったく好ましく、柔らかくなるようにする。というのも、甘い性質は渋い性質の克服であり、またまさに怒りを克服する神の慈愛の源だからであり、これによって渋い源は和らげられ、神の慈愛は立ち昇る。^{*4}」（第八章二一節）また、「甘い性質は、苦い性質に相対立するもので^{*5}」（第

*1 『アウローラー明け初める東天の紅』 蘭田坦訳、創文社、2002、328頁

*2 同上、92頁

*3 同上、28頁

*4 同上、90頁

*5 同上、29頁

1章二二節) であるという。ペーメは、甘い性質を描いているとしか思えない場面で、単に「水」とだけ書いていることがある。このことから、甘い性質はこの世界における水の働きを反映したものだと考えることができる。

ペーメはこれら三つの霊の関係について以下のように述べる。

「水 (= 甘い性質 * 筆者注) は希薄であり、他の二つは硬く、粗く、苦く、またいつでも互いに相対立している。それゆえにそこには絞め上げ、抗争、格闘が絶えない。しかしこの三者の絞め合いにおいてはいまだに生命は存せず、それらは一つの暗い谷であり、そして三つのものは互いに決して相容れ合うことなく、いつまでも互いに絞め合うのである。

*1) (第二十一章七六節)

「怒りの火はこれら三つのすべてのうちにある。というのも、渋味はあまりにも冷た過ぎ、身体をあまりにも硬く凝縮する。そのように甘味はあまりにも濃く、また暗くあり、それは渋味をたちまち捉え、それを掴まえたまますっかり乾燥させる。また苦味はあまりにも棘が多く、殺伐にして狂暴であり、ものと一体化することができないからである*2) (第二十一章八九節)

以上のように、三つの霊は一体化することなく常に揉み合っている。この運動のみでは、生命は存在し得ない。三つのうちでは渋い霊が最も強力であり、甘い霊を引き寄せ、乾燥させる。甘い霊は苦い霊を掴まえ、三つの霊は乾燥されながら激しく絞め合う。このような闘ぎ合いの中から不安 = 熱が産み出される*3)。この熱こそが第四の霊であり、第四の霊の発生をきっかけとして第五の霊、第六の霊が生み出され、第一の霊へと戻る円環を形成する。第七の霊はこのサイクルが行われる場として理解される。これがペーメの言う「神の七つの霊」の概要である。ペーメはこの概念を創世記における第三日を解釈するために用いている*4)が、第三日にはじめて七つの霊がこの世界を訪れたというわけではない。七

*1 『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、328-329頁

*2 同上、330頁

*3 同上、第二十一章七八節-八一節、329頁

*4 同上、第二十一章参照

つの霊は常に在ったと言えるし、また第一から順番に発生するものでもなく、七つの霊が同時に在る。身体を形成する霊と神性を形成する霊が同じサイクルにあるというのが、ベーメの「神の七つの霊」の大きな特徴であり、ベーメはこの仕組みによって現実の悪を理解しようとしたのだと思われる。

2.ベーメの創世記解釈

ベーメが導入した神の七つの霊は、天地創造においてどのような働きをしたのか。またその働きのうちで、この世界にどのようにして悪が内包されることになったのか。ここではベーメの創世記解釈を、悪の誕生という面に注目しながら考察していく。

ベーメは創世記の以前に起こったこととして以下のように書いている。

「そこで注目してほしい。今や神が第三の誕生のうちにあつて、ルチフェルの外廷において——そこはこの世界の場所と空間の全体であつたが——怒りを発したとき、光はその第三の誕生のうちで消え去り、すべては闇と化した。^{*1}」(第十八章一〇節)

第三の誕生とは、人間が生活している世界の誕生、即ち天地創造を指す^{*2}。つまり人間が生活するこの世界は、かつてルチフェルが王として君臨し、彼の墮落によって荒れ果て、神の怒りによって光すら失われた場所なのであつた。ベーメにおいては、神は人間のために新たな世界を創造したわけではないのである。

天地創造の第一日、神はその「粗く、荒々しく、冷たく、硬く、苦く、また酸っぱくなり、いくつかの隅々では悪臭を放ち、がたがたに壊れやすくなつた^{*3}」(第十八章一〇節)世界に再び光をもたらす。

「神は第一日に、その怒りの点火において生じた潰敗せるサルニテルを凝縮し、あるいは強力な霊によって創つたのであつた。というのも、創るという語は、ここでは凝縮するこ

*1『アウローラー明け初める東天の紅』 藪田坦訳、創文社、2002、260頁

*2同上、第一の誕生は子の誕生、第二の誕生は天使の誕生である。第十二章参照

*3同上、260頁

とだからである。^{*1}」(第二十一章三節)

これがベーメにおける創世の場面である。凝縮、強力な霊という言葉に注目したい。ベーメは洪い霊をして「地のうちにある質量を凝縮し、これをその鋭い冷たさによって乾燥させる。^{*2}」と語っている。この描写から、第一日に荒廃したサルニテルを再誕に導いたのは洪い霊だと推測できる。零からの創造ではなくすでにあったものを凝縮したので、再誕された大地は神の怒りを内包したものとなった。こうした世界理解もあってか、大地に対するベーメの評価は辛辣である。

「しかし地は最も外的な誕生の潰敗せるサルニテルから生成した。これは否定できない。地や石をじっと見るとき、あなたはそれらのうちに死があると言わざるを得ないであろう。逆にまたあなたは、それらのうちには生があるとも言わねばならない。そうでなければ金や銀、また草や木もそれらのうちで成育することはないであろう。^{*3}」(第十九章五七節)

「ここで教示しよう。最も外的な地は苦い汚物であり、死んでいる。これは誰もが分かる。だがそのサルニテルは、怒りによって殺されたのである。なぜなら、神の怒りが地のなかにあることは否定され得ないからである。そうでなければ大地はかくも洪く、苦く、酸っぱく、また有害でもないであろうし、またそうした有毒な悪しき虫類を産むこともないであろう。^{*4}」(第十九章五九節)

すでに述べたように、ベーメは都市で生活した一市民であり、厭世家でも隠遁者でもなかった。従って大地へのこの評価は、彼が体験した神の世界とこの世界とを対比させてのものと考えなければならない。ベーメはこの苛酷な世界もまた神の産物であることを認めており、全能であるはずの神がこのような世界を創った理由として、ルチフェルの墮落か

*1 『アウローラ―明け初める東天の紅』 藪田坦訳 2002 創文社、316頁

*2 同上、328頁

*3 同上、289頁

*4 同上、289頁

ら創世記へと至る過程を挙げているのである。ベームは大地を悪、天を善と二神論的に考えていたわけではない。神の似姿として生まれたルチフェルが、神のごとき自由のために自己への認識を誤り、神はこれに怒り、その怒りのために人間の住む世界は憤激性を内包することになった。すべては神の自由に起因するのである。この解答は、ルチフェルの墮落が神との対立、秩序との対立であり、関係性であるので、悪は実在しないとしたパラケルススの結論に似ている。

続いて第二日に、神は水と大気を作った。ここでいう水とは、甘い性質と同一のものではなく、この世界に存在する水のことである。ベームにとって水と大気は、それぞれ身体と霊に結びつけられたことは第二章で述べた。またこれらの概念はときに疫病をもたらすものでもあった。大地の場合と同様に、この世界の水や大気もまた死を内包している。しかしもちろん「この水はまったく神から見放されていると言うのではない。なぜならそのうちでの心胸はなお天空の誕生に属し、この誕生から聖なる誕生が生み出されるからである。*1」（第二十章二七節）という理解のとおり、そこには祝福も存在する。だが生命の水と死の水は、「この世界の時のうちでは身体と魂のように互いに依りかかり、しかもどちらも他を把握しないというありさまであった。*2」（第二十一章七節）のである。ベームがこの世界の水を生と死の両方の相をもつものとして描いている理由がここにある。

ベームにおいて水とは、すべてのものの身体を形成するものであった。地上にとどまっている水は、大地もまたそうであったように死の相を持ち合わせている。よって水から作られた身体もまた、死を内包するものということになる。これが、ベームの創世記解釈に基づく身体理解である。

ベームは人間の身体について、神の身体と比較して以下のように表現している。

「そこで注目してほしい。地はまさに地の上方の深みあるいは天がもつような、そうしたもろもろの性質と根源霊をもち、そのすべてが互いに一つの身体にともに属している。そしてまったき神がその一なる身体なのである。けれどもあなたがその身体を全体的に見ることも知ることもないのは、それは罪のせいであり、そしてあなたはこの神的な大いなる

*1 『アウローラ―明け初める東天の紅』 蘭田坦訳 2002 創文社、305頁

*2 同上、316-317頁

身体において、その罪とともに死せる肉のうちに閉じ込められているのである。^{*1}」(第二十一章六五節)

「それゆえに人間は、この地上において自らの身体のうちに悪魔の永遠の棲み家を担っているのである。^{*2}」(第二十一章六八節)

ここでの罪とはルチフェルの墮落のことである。ペーメは人間の身体が天上にあるものといかに違うのかを述べ、人間の身体に悪が起こりうる可能性を示唆している。この地上の水が生と死の二つの相を有しており、また肉体は水から生まれるので、こうした結論に至ったというわけである。

第三日には草木が創造された。創世記によれば大地はこの日に創られたのであるが、ペーメにおいてはすでに第一日に大地はあったことになっている。そのためか、ペーメは第三日の解釈の大半を神の七つの霊の解説に費やしている。第四日の解釈では天空の誕生が述べられる。『アウローラ』の原題である『明け初める東天の紅』の意味するところが明かされるが、この論文で取り上げるに重要な点は少ない。しかしペーメが太陽とともに土星を高く評価しているのは、彼の人生を考えるに興味深いところである。

「太陽は生命の心胸であり、この世界の身体のうちなるすべての霊の起源であるが、それと同じように土星はあらゆる身体性と把握可能性の指導者である。そしてこれら二つの惑星の権限のうちにこの世界の全身体は存立し、そしていかなる被造物ないし形成、同じくいかなる可動性も、この両者の権限を抜きにしてはこの世界の自然的な身体のうちに生じないであろう。^{*3}」(第二十六章二節)

「しかしながら土星の起源は、この世界の全身体における緊迫した、渋く厳しい不安の状態である。^{*4}」(第二十六章三節)

*1『アウローラ—明け初める東天の紅』 藪田坦訳、2002、創文社、326頁

*2同上、327頁

*3同上、404頁

*4同上、404頁

土星とは古来よりメランコリーと結びつけられる惑星であった。ベーメが憂鬱によって神秘体験に導かれたことを考えるなら、この土星に対する評価は彼自身の憂鬱への賞賛ということにもなるのかもしれない。ベーメの占星術への関心がうかがえる部分である。

ベーメは惑星の誕生を記して創世記解釈を終えている。人間や動物の創造については『アウローラ』の各所で触れているためか、改めて章を設けていない。

3.ペストの成り立ち

世界は神の怒りを内包している。この世界で創造されたからには、人間もまた憤激性を内包することになる。このような理解のもとでは、ペストという悪疫はどのようにして成り立つのだろうか。

ベーメによれば、水において苦い霊と甘い霊が点火される場合に腺ペストが起こるということだった。ベーメは水と甘い霊との関わりをたびたび書いており、水＝甘い霊と想定すべき場面も多くあるが、ここでの水とは文字通りこの世界における水のことであると考えられる。その直前に、「肉においてであれ、あるいは地中から生育するものであれ、すべての物の身体は水において成り立ち、霊は大気において成り立つ^{*1}」という一文があり、水＝身体を想定して論じられているからである。水＝身体においてコアである苦い性質に甘い性質が浸み入り、これが憤激性において点火されるとき、ペストの浮腫が表出すると理解できる。ベーメは別の箇所、苦い性質の憤激性が水の元素のうちに点火し、湧出するとき、「それは肉を衰弱と疾病にもたらし、最後はやはり死へと到らせる^{*2}」と書いており、また甘い性質は基本的には憤激性を抑えるものとされているので、ベーメにおける疾病は苦い性質を基本として発生すると想定できる。病という現象をとってみても、そのコアには苦い性質があるということである。ベーメにおける別のペスト描写もまた、苦い性質に関わるものであった。

「それ（苦い性質 筆者注）があまりにも高められ、動かされ、あるいは点火されるとき、それは甘い性質と渋い性質に点火し、自ら引き裂き、突き刺し、燃え上がる毒のようであ

*1『アウローラ―明け初める東天の紅』 蘭田坦訳、2002、創文社、第一章十五節、28頁

*2同上、29頁

る。それはちょうどある人が引き裂くような悪性の腫瘍をもち、その痛みにうめき叫ぶときのようなものである。^{*1}」(第八章二八節)

身体のコアは苦い性質である。それが点火されるとき、水=身体は異常を来す。この理解が基本として存在する。水=身体は甘い性質も内包しており、苦い性質=コアのもとで甘い性質が点火されるとき腺ペストが起こる。これがペーメにおけるペストの発生である。

では、腺ペストにおいて渋い霊はどこに働いているのか。人間が把握することのできる三つの霊は常に揉み合い、相対立している。渋い性質と甘い性質が働くとき、そこには渋い性質も存在するはずである。

渋い性質の主たる働きが凝縮であることはすでに述べた。ペスト特有の病態であるブポーは、この凝縮という点において渋い霊の作用を感じ取れる部分である。ブポーは主にリンパ節に形成され、拳大に肥大化し、元々が人間の皮膚であったとは考えられぬほどに硬くなる。「つまりこの源(渋い性質 筆者注)が点火されるとき[……]、そのなかで大いなる渋い冷たさが発現するのであり、それは塩のように辛く、また石のようにまったく硬く凝縮している。^{*2}」(第八章一六節)このような描写から、ブポーの発生は渋い性質に依るところが大きいと推定できる。

甘い性質には、渋い性質が乾燥させたものへ浸み込み、柔らかくするという特性がある。甘い性質は硬く凝縮したブポーに浸透し、柔らかくする=憤激性を和らげる。近世においては、打膿法にてブポーを破り、膿を出し切ることが治癒への近道とされていた。渋い性質の働きによって硬く凝縮したブポーを甘い性質が和らげたとき、それは破れやすくなる。甘い性質が憤激性を和らげる、というプロセスによって、ペストの治療を表現することができるのである。

三つの霊は、どの物質にどの霊が宿る、というかたちではなく、はじまりと終わりを持たないかのように常に揉み合いながら存在している。苦い性質の中で甘い性質が点火されたときペストの浮腫が表象され、渋い性質がそれを硬く凝縮する。この憤激性を鎮めるのは、点火されていない状態にある甘い性質の役割である。甘い性質が渋い性質に浸み入る

*1『アウローラ―明け初める東天の紅』 蘭田坦訳、2002、創文社、92頁

*2同上、89頁

と凝縮と乾燥は和らげられ、病は快癒へと導かれる。しかし甘い性質が渋い性質に受け入れられないとき、あるいは甘い性質自身が憤激性を発揮するとき、もはや患者を救う手立てはなくなる。三つの霊のすべてに生と死の相があり、どの性質が表象されるかによってひとの生き死にが決まる。そして三つの霊の性質を決定するのは神の怒りに端を発する憤激性である。バーム神学の中心には、常に神の怒りが据えられているのである。

中近世において、ペストは神の怒りによるものであった。ペストに晒された人々の中には、それまで以上に敬虔になることで恐怖を乗り越えようとしたものがいた。彼らにとっては神に祈ることが、怒りを鎮めてもらうことが、ペストへの最大の対抗手段だったのである。バームもまたペストのただ中で神に祈ったはずだ。祈りの中で彼は悪の問題を考え、この世界の成り立ちを考え、神の存在を考えた。その成果が『アウローラ』であり、その神智学的ヴィジョンの中には、ペストの発生から治癒に至るまでのプロセスを見出すことができるのである。

結論 バーム神学におけるペスト解釈

ペスト禍はバームの人生に暗い影を投げかけた。ペストは神の怒りであるという通説が、彼の思索にいかなる影響を与えたのかは想像するほかない。バームはもちろんのこと当時の人々にとってペストがいかに身近で、いかに衝撃的なものであったかはこれまで述べてきたとおりである。苛酷な時代を生きたバーム、敬虔なキリスト教徒であり父親であったバームにとって、ペストは戦乱や飢餓を超えた眼前の脅威であった。神秘体験の前後、次男の死の前後、『アウローラ』を決然と書き始める前後、バームの人生の決定的瞬間にはいつもペストの流行があった。この災厄にバームがどのような思考を投げかけたのか、それを検討することで、バームの思想を解釈する一助となればと考えた。

この論文を通して見えてきたことは、バームの書く「神の怒り」が、決して形而上学的な概念ではなく、彼にとって切迫した問題であったということである。中近世の人々はペストを無視して生活することはできなかった。主著『アウローラ』における病・ペストへの描写を読めば、バームもまたペストについて一定の知識を持っていたことは明らかである。バームが繰り返し説く「神の怒り」とは、中近世においてペストの主たる原因だと考えられ、キリスト教社会に広く認識されていた概念であった。また、そうであるにもかかわらず、バームも嘆いているように、信心深いものにペストが訪れ、無信仰なものが健在であるという事態も多く見られた。果たしてこの「神の怒り」とはいかなるものなのか。

キリスト教社会で長く問われてきた悪の問題を、神の怒りの問題として捉え直したとき、
ベーメの神学が生まれたのではないだろうか。

処女作としての『アウローラ』が不用意に広まってしまったことで、ベーメは教会から
異端の疑いをかけられる。彼は断筆を誓い、『アウローラ』以前にそうであったように一市
民に戻る。彼が再び筆を執ったのは、三十年戦争のはじまったその年であった。以後彼は
行商人として各地を歩きながら著作を書き進める。ベーメの思索はこの1618年以降に盛期
を迎えた。従ってベーメの著作のほとんどは、三十年戦争における混乱と宗教上の危機を
反映しているものと考えられる。しかしベーメが決定的な神秘体験に導かれたとき、そし
て彼がその体験をもとに『アウローラ』を書き上げたとき、彼が相対していた最大の禍は
ペストであった。このことを無視することはできないはずである。

参考文献

・ベームの著作

『AURORA』1977 Gerhard Wehr 編 Aurum Verlag

『アウローラー明け初める東天の紅』 藺田坦訳 創文社 2002

『キリストへの道』 福島正彦訳 松籟社 1991

『ベーム小論集』 藺田坦・岡村康夫・松山康国訳 創文社 1994

『ヤコブ・ベーム キリスト教神秘主義著作集 <13>』 南原実訳 教文館 1989

・ベームについて

岡村康夫『無底と戯れ—ヤコブ・ベーム研究』 昭和堂 2012

岡部雄三『ヤコブ・ベームと神智学の展開』 岩波書店 2010

岡部雄三『ドイツ神秘思想の水脈』 知泉書館 2011

香田芳樹『魂深き人びと』 青灯社 2017

藺田坦『無底と意志—形而上学 ヤコブ・ベーム研究』 創文社 2015

南原実『極性と超越 ヤコブ・ベームによる錬金術的考察』 新思索社 2007

福島正彦『ベーム倫理思想の研究』 松籟社 1984

アレクサンドル・コイレ『パラケルススとその周辺』 鶴岡賀雄訳 風の薔薇 1987

板橋勇仁「『自分は自分である』ことと『我性』への『想像/構想』：西谷啓治によるヤコブ・ベームの思想への理解とその射程」 『哲学論集』41号, 73-96, 2012

岡村圭真「ヤコブ・ベーム論」 『密教文化』101号, 58-71, 1973

小嶋洋介「鏡の丸い眼 ——『眼と精神』に提示される<鏡>の存在論的パースペクティヴ」 『メルロ＝ポンティ研究』18(0)号, 3-15, 2014

高山信雄「コウルリッジとドイツ文学（二） ——コウルリッジとヤコブ・ベーム」 『法政大学教養部紀要』57号, p17-42, 1986-01

中山みどり「ヤコブ・ベームにおける悪の思索 ——形而上の悪と人間——」 『比較文学・文化論集』17号, 69-79, 2000-02-29

・ペストについて

加藤茂孝『人類と感染症の歴史』丸善出版 2013

滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社 2002

津野海太郎『ペストと劇場』晶文社 1980

宮崎揚弘『ペストの歴史』山川出版 2015

ヒルデ・シュメルツァー『ウィーン ペスト年代記』進藤美智訳 白水社 1997

ダニエル・デフォー『ペスト』平井正穂訳 中公文庫 2009改版

ボッカッチョ『デカメロン』平川祐弘訳 河出文庫 2017

モニク・リュスネ『ペストのフランス史』宮崎揚弘・工藤則光訳 同文館 1998